



世界の子どもたちの
地球想い展

国連子供環境ポスター原画コンテスト作品集

世界の子どもたちの
地球想い展

国連子供環境ポスター原画コンテスト作品集



はじめに

『国連子供環境ポスター原画コンテスト』の応募作品には世界中の子どもたちの、地球、環境、自然を大切にしたいという強い想いがこめられています。その共通の想いは、民族、年齢などにより異なる、さまざまなモチーフで表現されています。

総合地球環境学研究所では、これら子どもたちの目を通した、人間と地球環境の関わりを映し出す作品群を、20万点以上収蔵しています。絵は常に私たちに問い続けます。私たちは何をしてきたのか、どこへ向かうのか、と。それと同時に、絵は常に教えてくれます。私たちはいつも同じ地球の上でつながりあっているんだ、と。

今回の作品集は、これらのコレクションの一部を『世界の子どもたちの地球想い展』としてテーマごとにまとめ、また、コレクションを活用した社会・環境教育活動の一端をご紹介しますものです。

このコレクションには大きな可能性が秘められています。ご高覧頂き、新たなアイデア、それぞれの場との連携のご提案などを頂ければ望外の喜びです。

総合地球環境学研究所

阿部 健一

Index

世界の子どもたちの地球想い展

Wonderful この地球が好き	5
Life 生きるって楽しい	11
SOS 叫び	17
Fear 不安	23
Ego 人間って	31
Dual nature 二面性	35
Revival 元気になって	39
Cycle いのちのつながり	45
Pray 祈り	51
Imagination 想いを描く	55

国連子供環境ポスター WorkShop

Workshop Design ① 学芸員になってみる	64
Workshop Design ② カルタをつくる	66
Workshop Design ③ つながりをつくる	68
Workshop Design ④ 水・草原・森	70
Workshop Design ⑤ 絵本をつくる	72
鑑賞教育から始まる3つの学び	73
ワークショップで育む「共に生きる」感性	74
Listening Together ～共に読み解くことの大切さを考える～	75
ワークショップと展示のこれまで	78

国連子供環境ポスター原画コンテスト

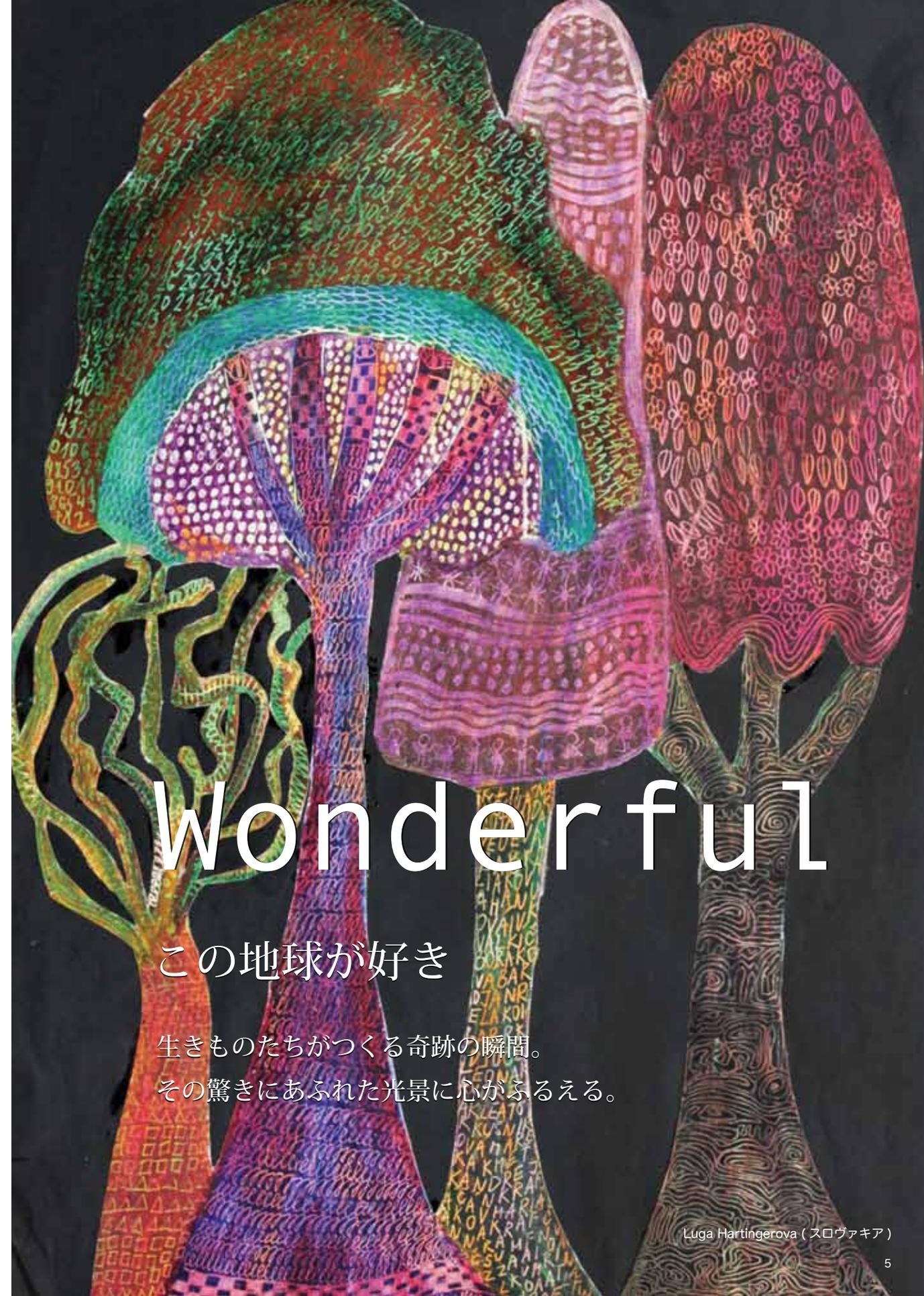
『国連子供環境ポスター原画コンテスト』は、国連環境計画（UNEP）、地球環境平和財団（FGPE）、バイエル（ドイツ）、株式会社ニコン（日本）が世界の中学生以下の子どもを対象に行っている事業です。毎年環境問題に関わるテーマを掲げ募集を行い、まず国連の6つの地域事務所（アジア・太平洋、西アジア、ヨーロッパ、アフリカ、北米、中米・南米）で予備選考を行います。その後、上位作品はケニアのUNEP本部、日本、ヨーロッパのいずれかで実施されるグローバル部門の最終審査に臨みます。優秀作は国連のカレンダー・絵葉書等に採用されるほか、世界各地で国連の行う環境に関わる催し物の折に展示されています。総合地球環境学研究所はこの事業の協力機関であり、コンテストの全応募作はすべて総合地球環境学研究所に寄贈されています。



グローバル部門審査会の様子
UNEP本部（ナイロビ）

世界の子どもたちの 地球想い展

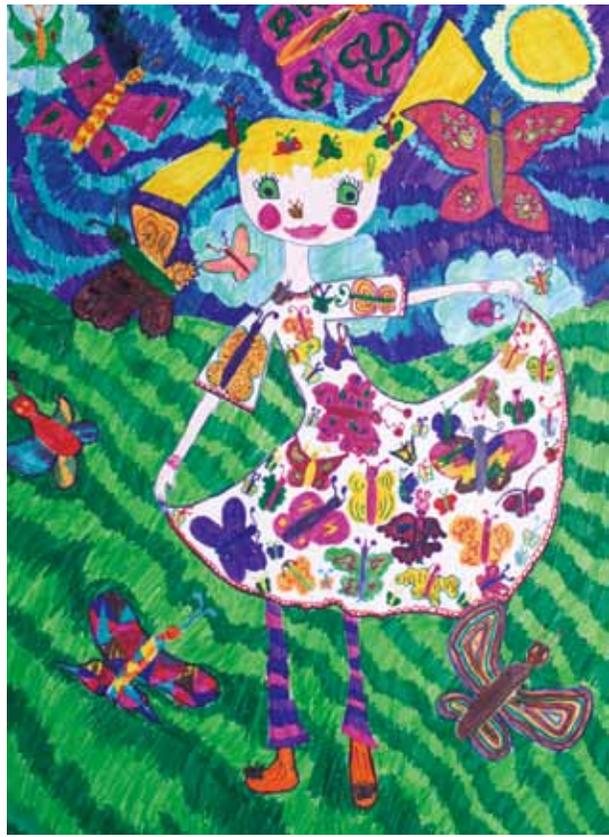
大切なのは、何かを想い、描くこと。
普段やり過ぎてしている何かに向きあい、心を伝えること。
子どもたちの絵は、そんなことも教えてくれます。
今回、言葉にしにくい感情をテーマに、
紙上での展覧会をデザインしました。
どうぞ、子どもたちの想いに耳を澄ませてみてください。



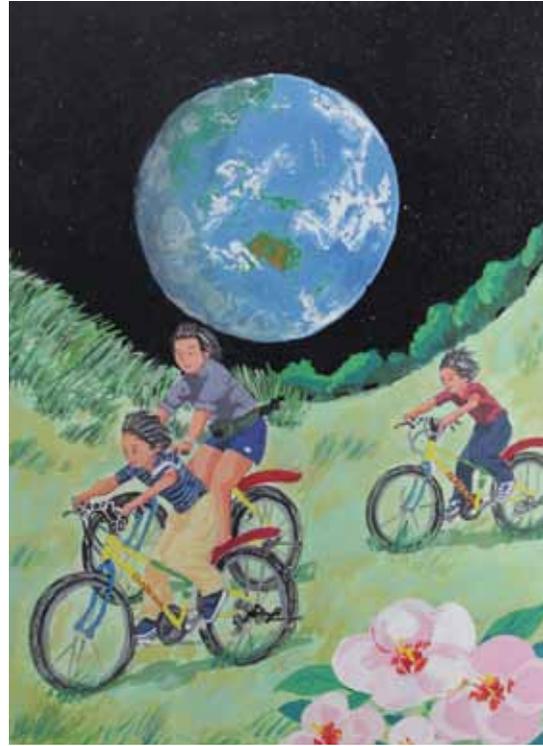
Wonderful

この地球が好き

生きものたちがつくる奇跡の瞬間。
その驚きにあふれた光景に心がふるえる。



Beliakova Irina (ロシア)



Yokoyama Daiki (日本)



Nalinrat Chansom Wang (タイ)



Wang Fei (中国)



Sidoriuc Eveline Georgeana (ルーマニア)



Sabrina Koppensteiner (オーストリア)



H.M.A Rasangie Marambage (スリランカ)



Jaakko Heikkila (フィンランド)



Zeinab Issam Jalabi (ヨルダン)



Zornitca Vladimirova Marinova (ブルガリア)



Mustafa Mohamed Talib (スーダン)



Nseabasi Okon Ilput (ナイジェリア)



Gustavo Nicolas Lami (アルゼンチン)



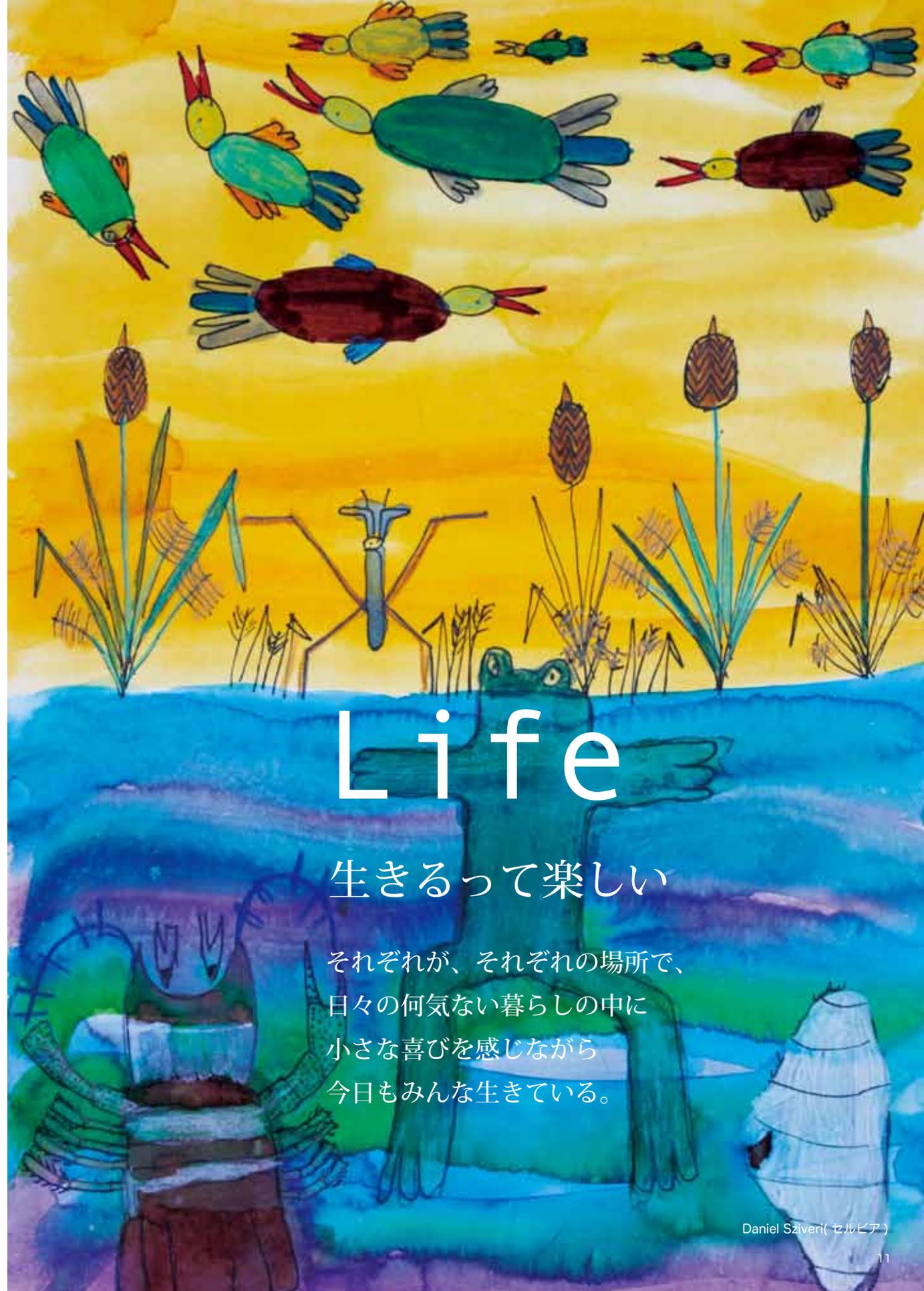
Felish Ombre Meza Vergolo (チリ)



Parijatham (インド)



K. Suredha Patale Pieris (スリランカ)



Life

生きるって楽しい

それぞれが、それぞれの場所で、
日々の何気ない暮らしの中に
小さな喜びを感じながら
今日もみんな生きている。

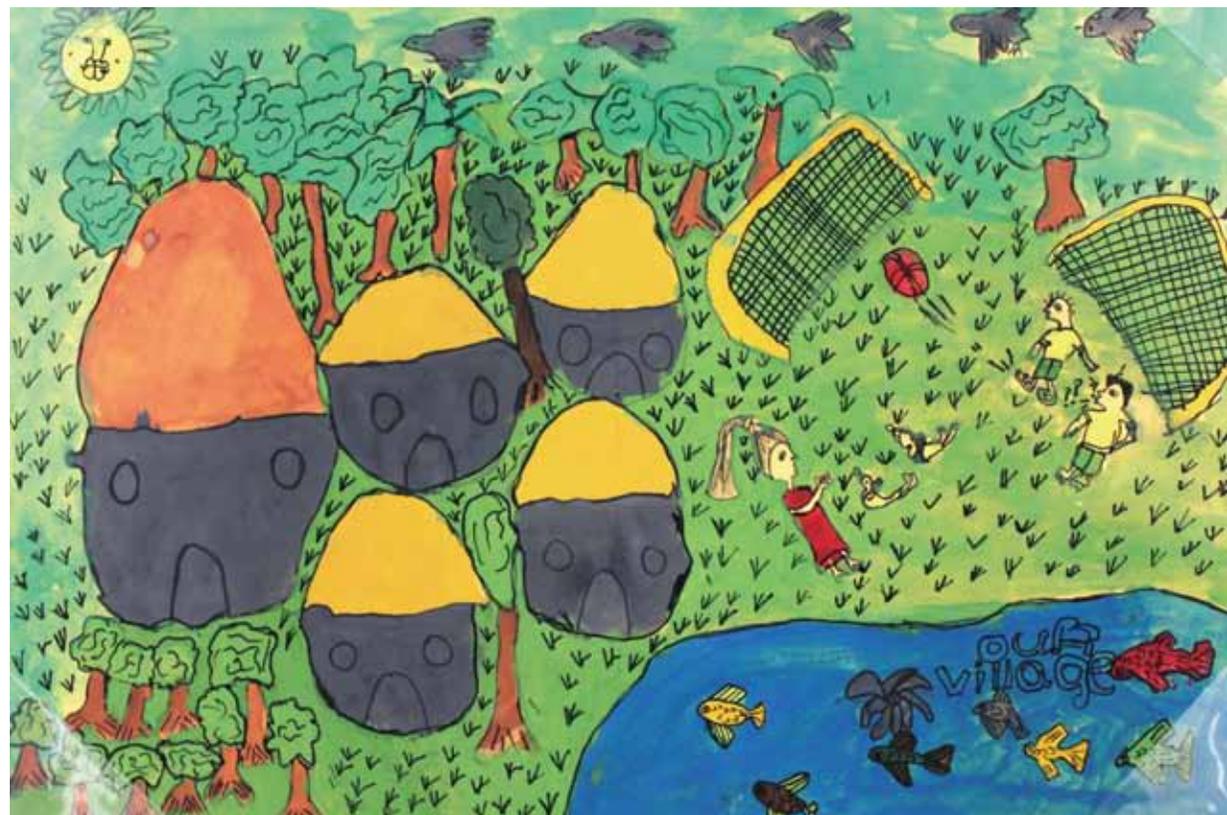
Daniel Sziveri(セルビア)



Miller Avina (カザフスタン)



Ganti Altidoka (シリア)



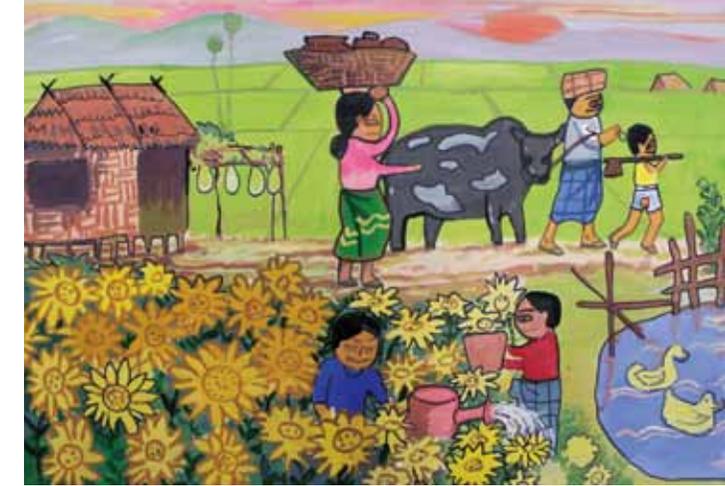
Hanna Mukami (ケニア)



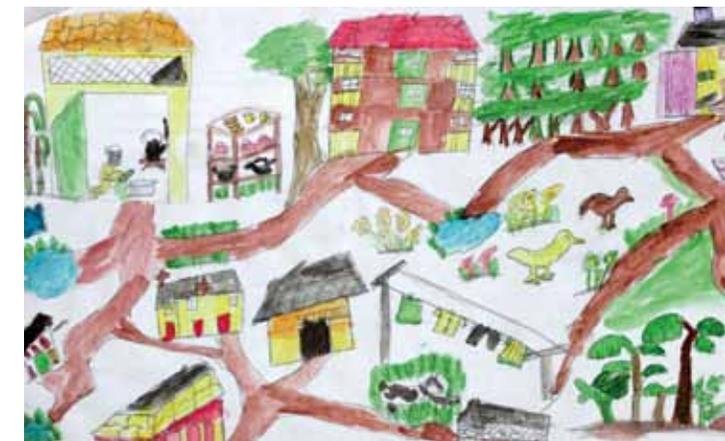
D. Kiran Kumar (インド)



Viola Caretti (イタリア)



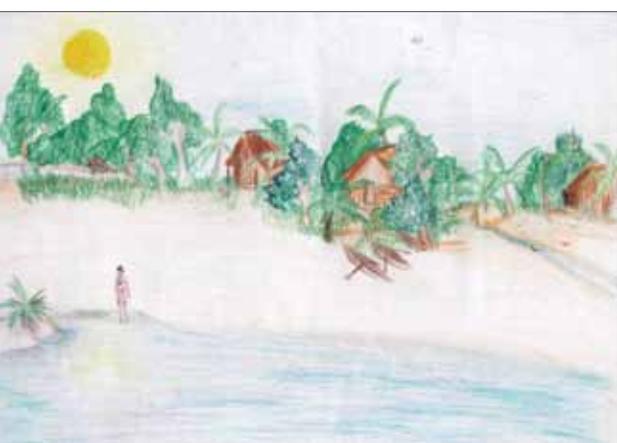
Phone Aung Kha (ミャンマー)



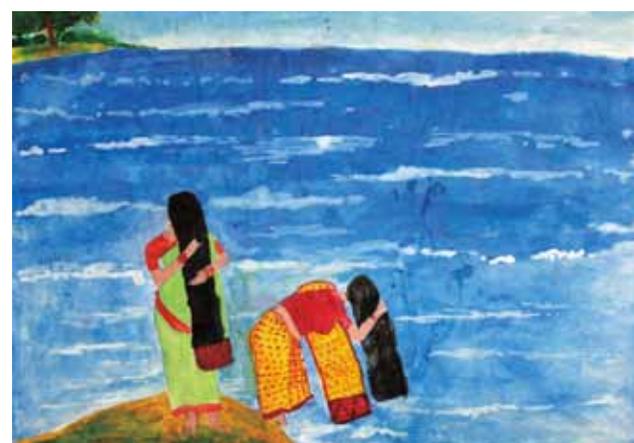
Komugabe Denise (ウガンダ)



Arun Rai (ブータン)



Rakotomihanta Alisoa Raozina (マダガスカル)



Duati Paul (バングラデシュ)



A. Shilpa (インド)



Nawaf Sulieman Al Atwy (サウジアラビア)



Zin Mar Win (ミャンマー)



Assita Abudou Sanda (ニジェール)



Shauri Timothy (タンザニア)

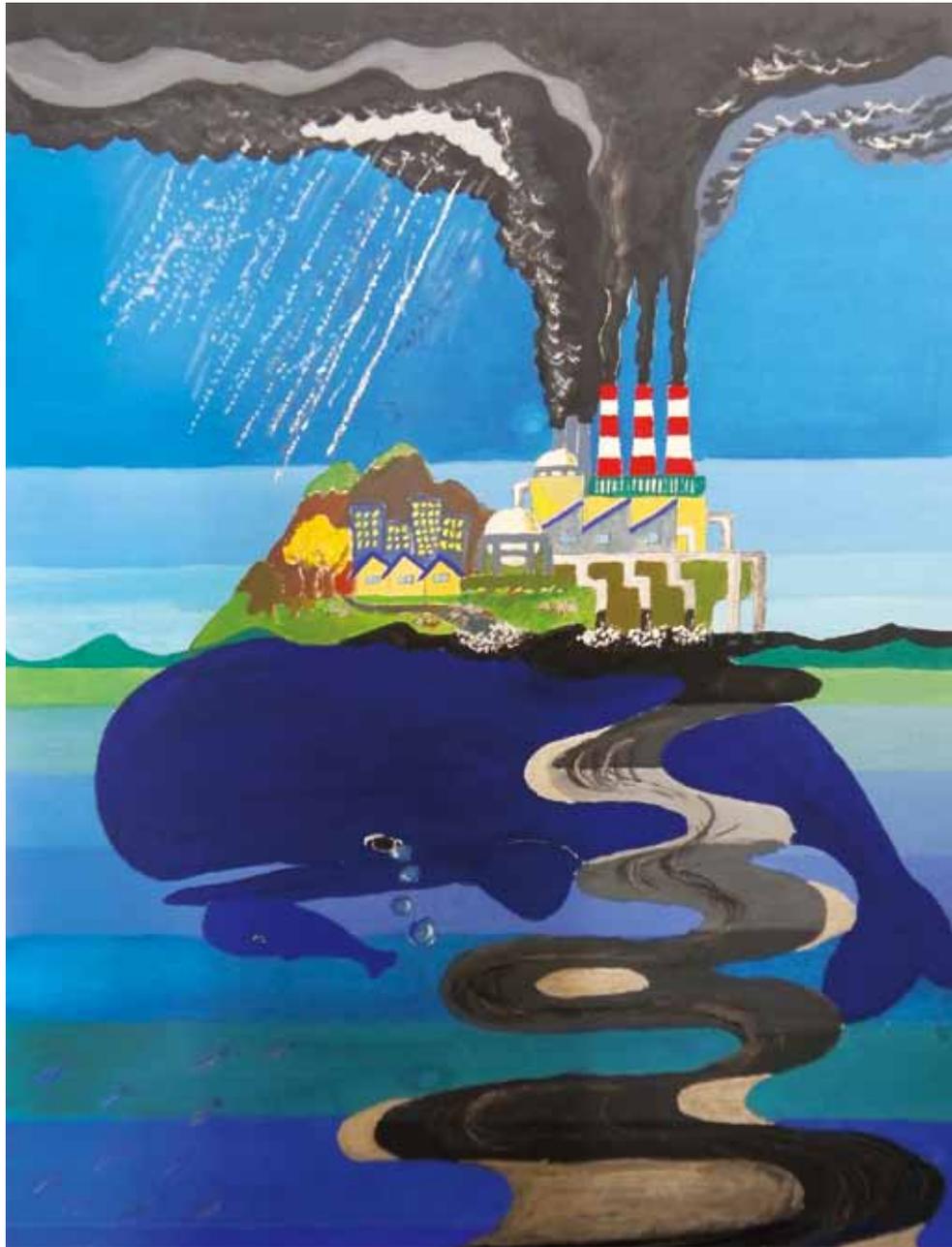
SOS

叫び

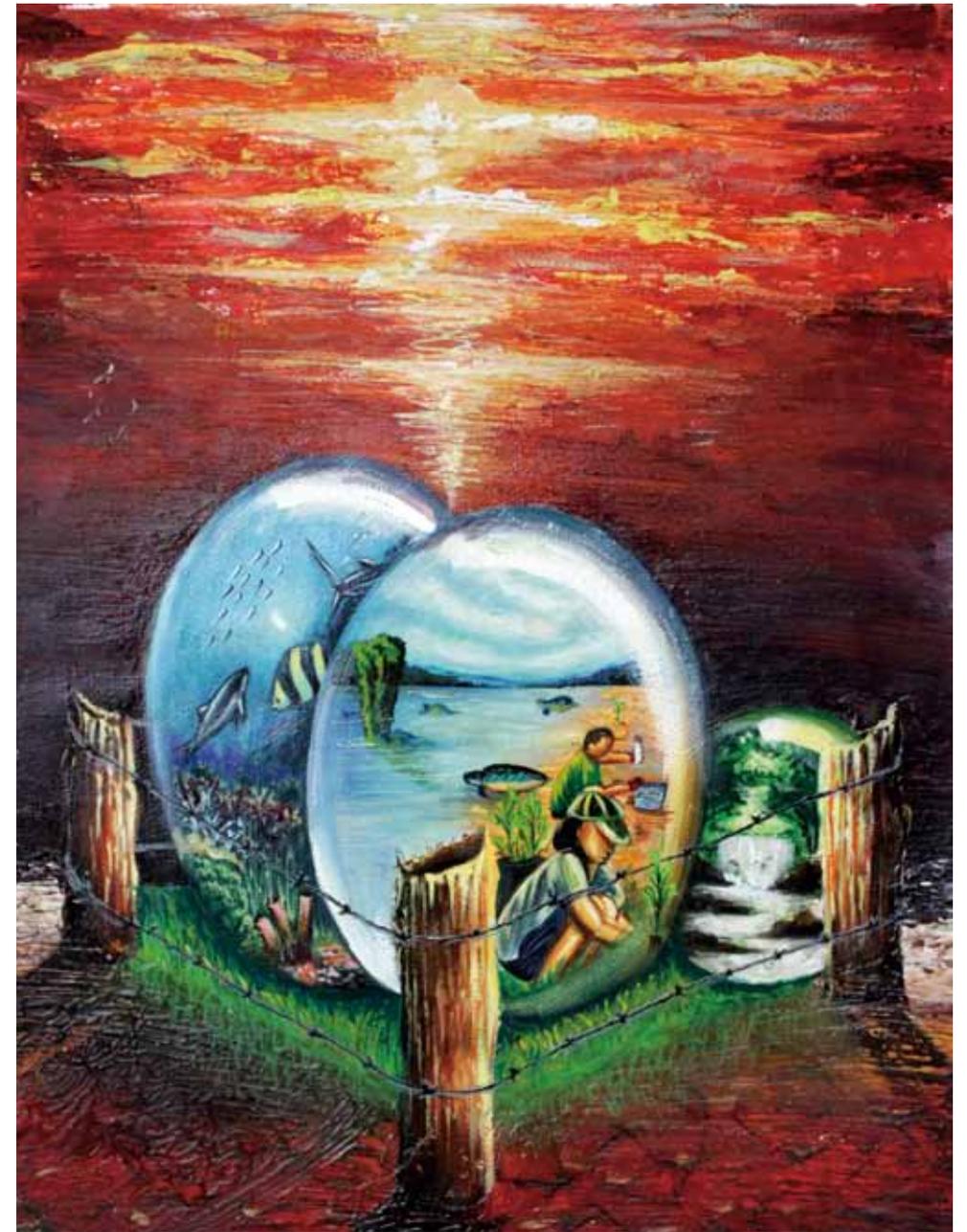
地球の悲鳴が聞こえる。
それは哀しくて、苦しい声。



Meywish Afzal (アラブ首長国連邦)



Aoki Mina (日本)



Jiranuwat Makloi (タイ)



Zuzana Braunová (チェコ)



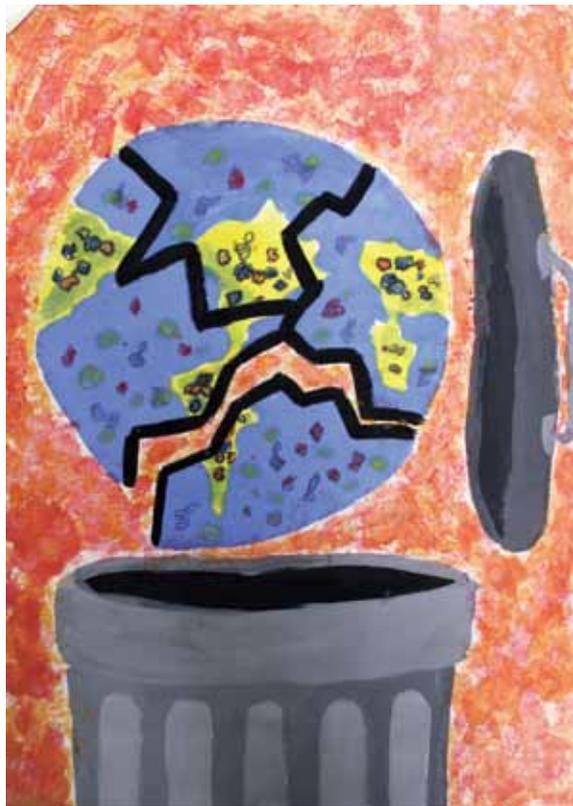
Rajai Hanna Shnoudeh (ヨルダン)



Zinta Stabina (ラトビア)



Christopher Scarr (ギリシャ)



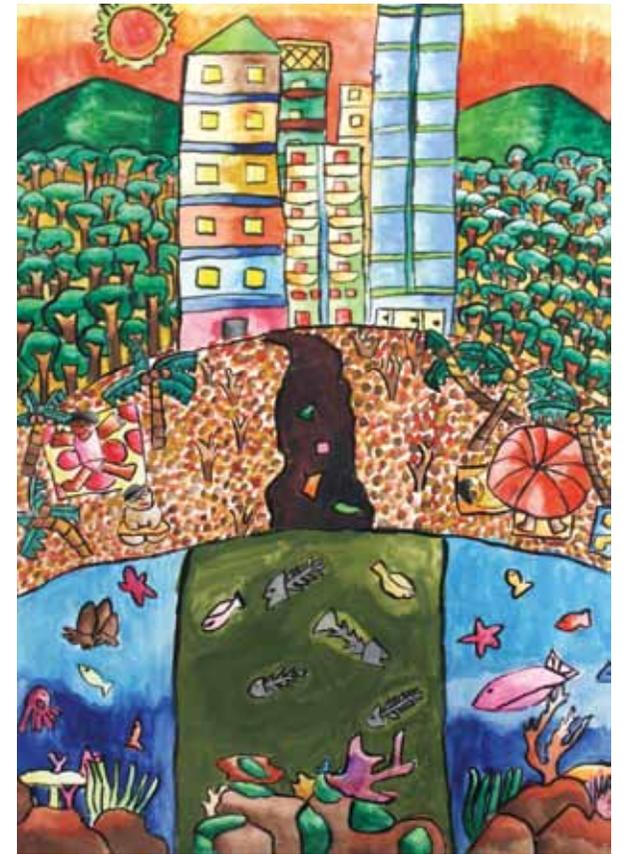
Ivana Rodriguez (メキシコ)



Min-jung Park (韓国)



Rami al Ramahi (ヨルダン)



Wattanachai Ratanapornsompong (タイ)



Terezia Higasova (スロヴァキア)



Zubrin Yuriy (ウクライナ)



Korbi Myriam (チュニジア)



Sonam Milan Shah (ケニア)



Mubarak Abdulaziz Almalik (カタール)



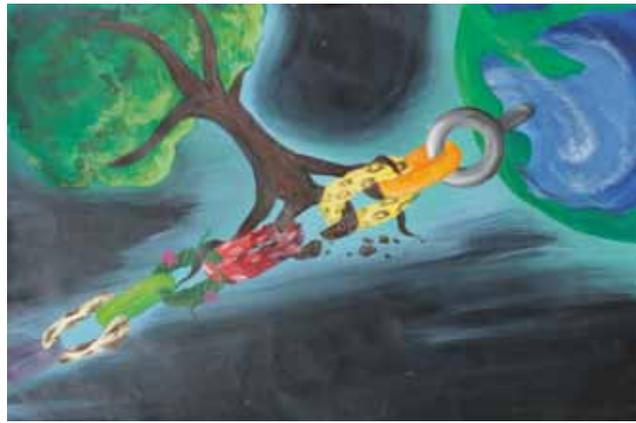
Benjamin Patrick Green (オーストラリア)



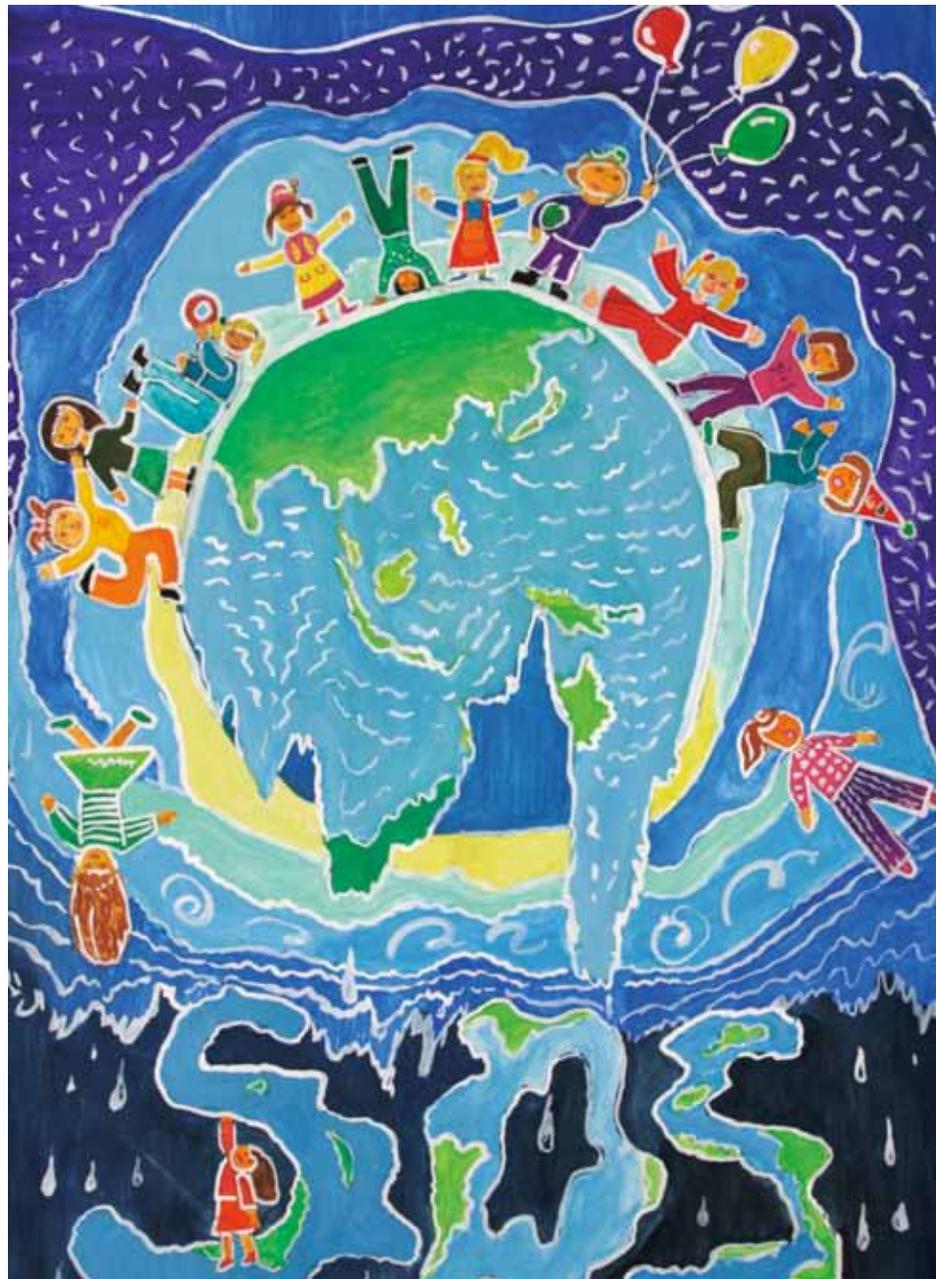
Rauda Usman (シリア)



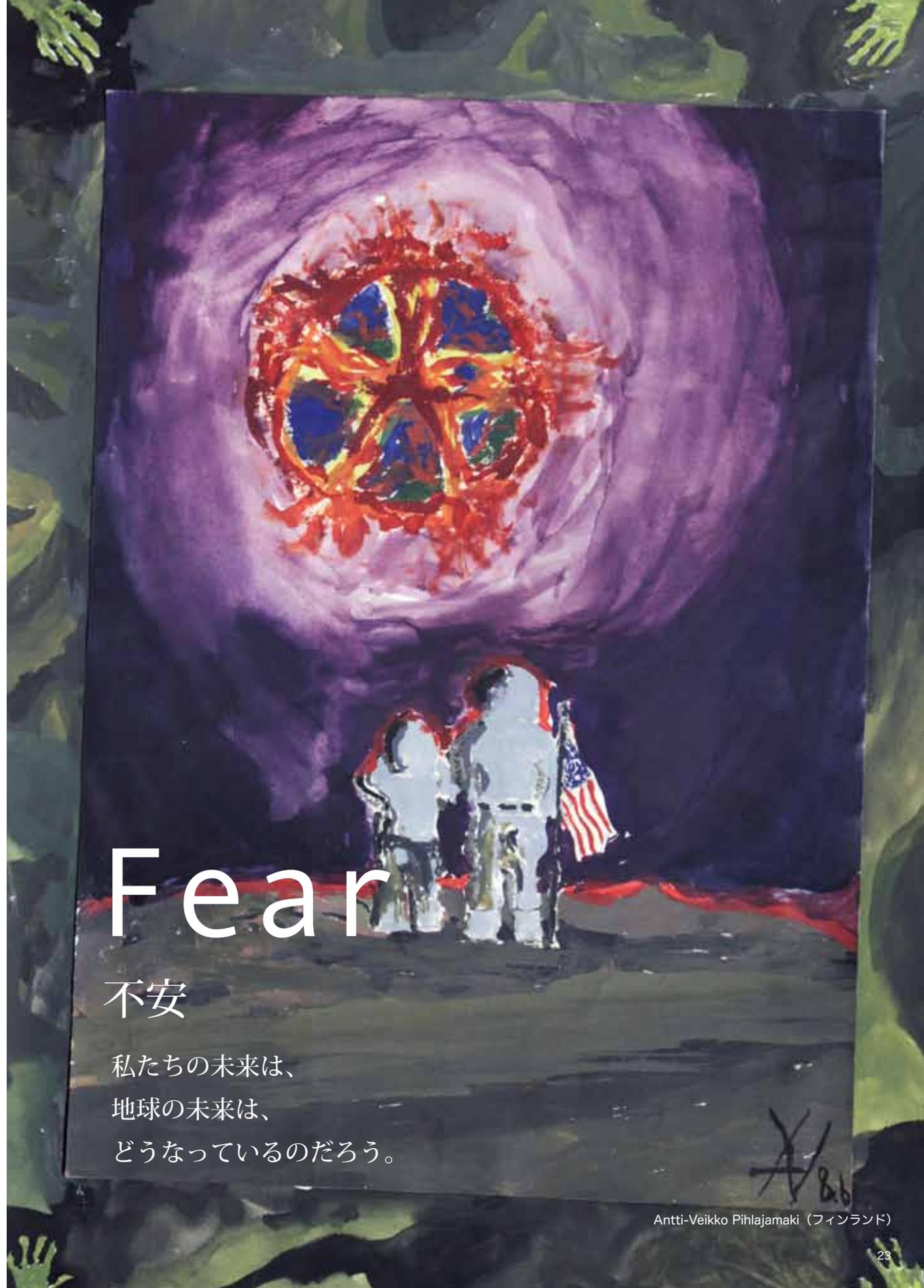
Mariana Hansen (アルゼンチン)



Cissy Yao (カナダ)



Petkova Polina Sdravkova (ブルガリア)

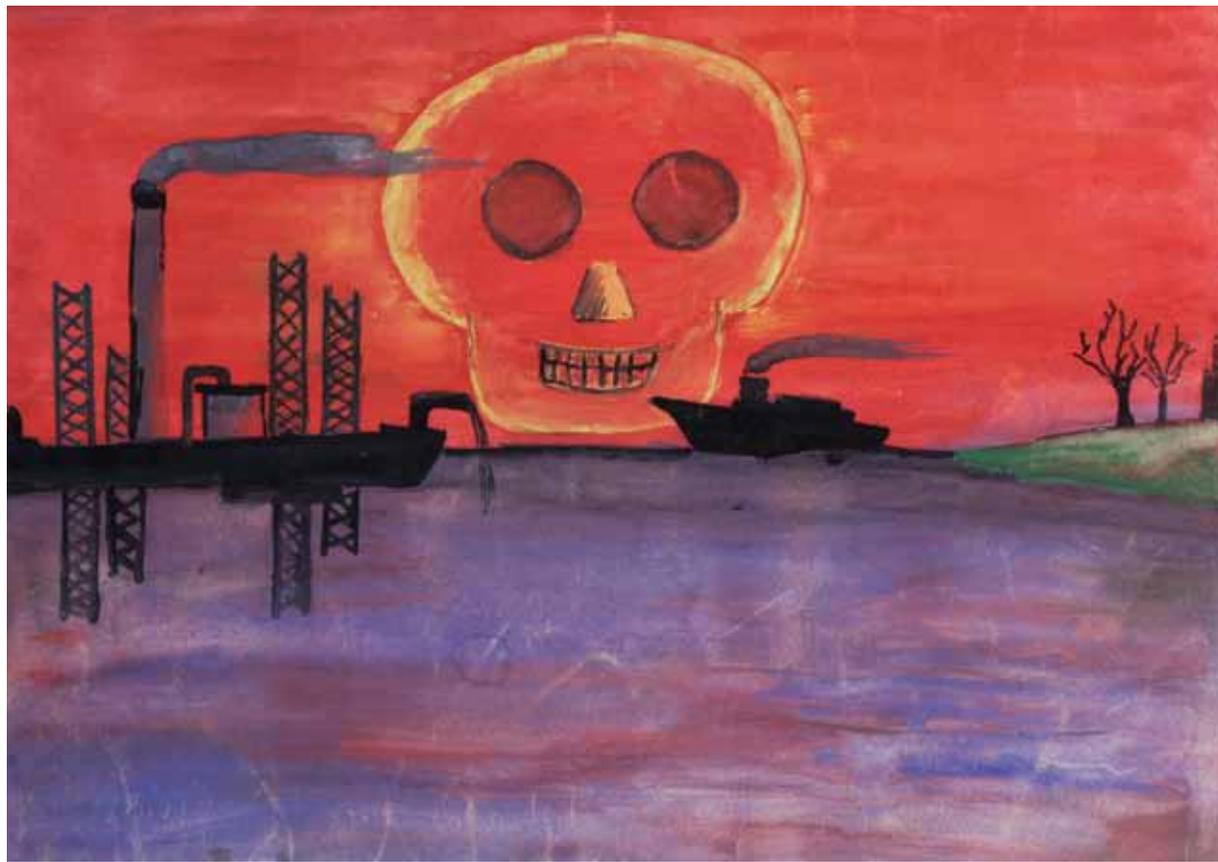


Fear

不安

私たちの未来は、
地球の未来は、
どうなっているのだろう。

Antti-Veikko Pihlajamaki (フィンランド)



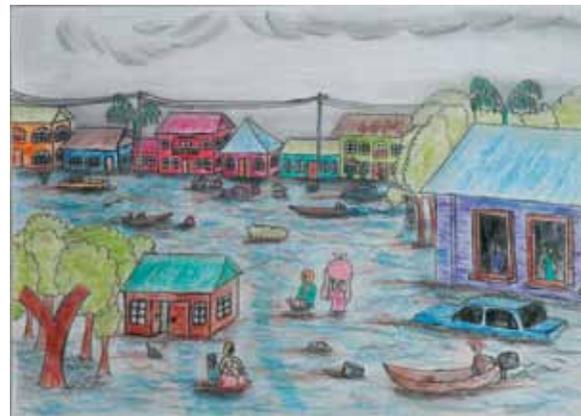
Satish Kumar (インド)



Bouzoukis Spyridon (ギリシャ)



Sara Abou Osman (スーダン)



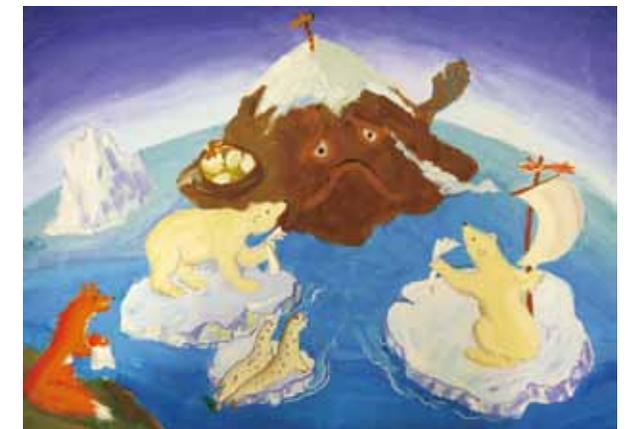
Najrien Bin Juani (ブルネイ)



Mohammad Abdil Nasser Attalah (パレスチナ)



Julio Meiron (ブラジル)



Julia Kochetkora (ロシア)



Veronica Kupec (アルゼンチン)



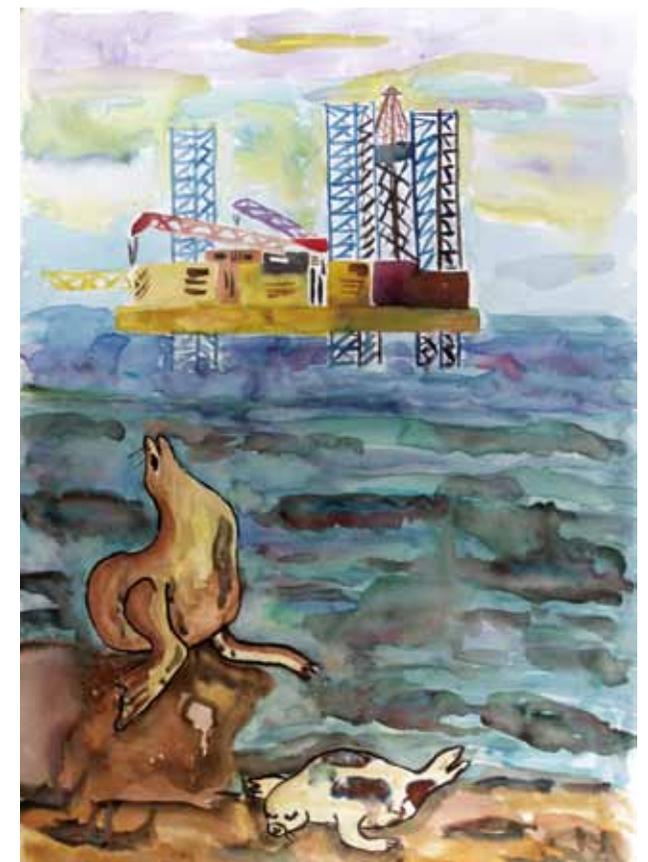
Jaroslav Pavlicek (チェコ)



Nastia Ludino (ペラルーシ)



Adam Loh (オーストラリア)



Abbasova Khumar (アゼルバイジャン)



Devina Bcypai (インド)



A. Sridhar (インド)



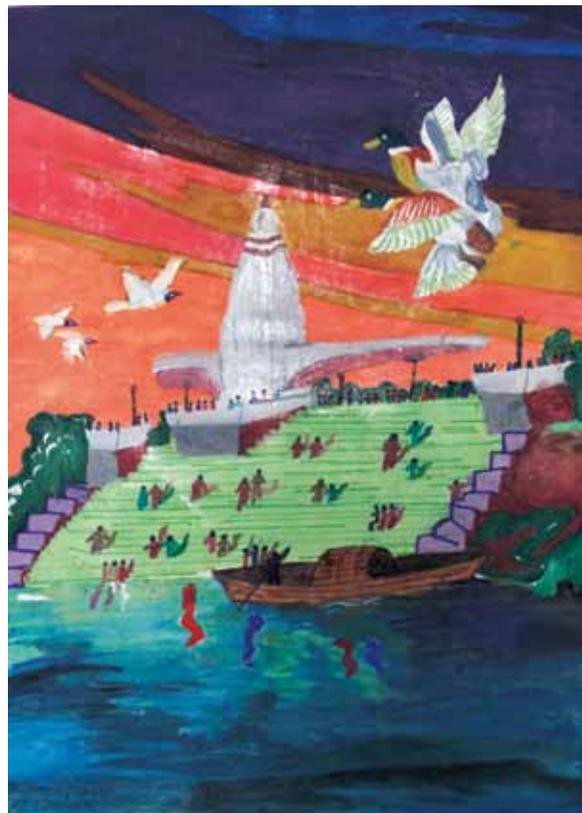
Gomez (アルゼンチン)



Theerawat Nuchcharoenpol (タイ)



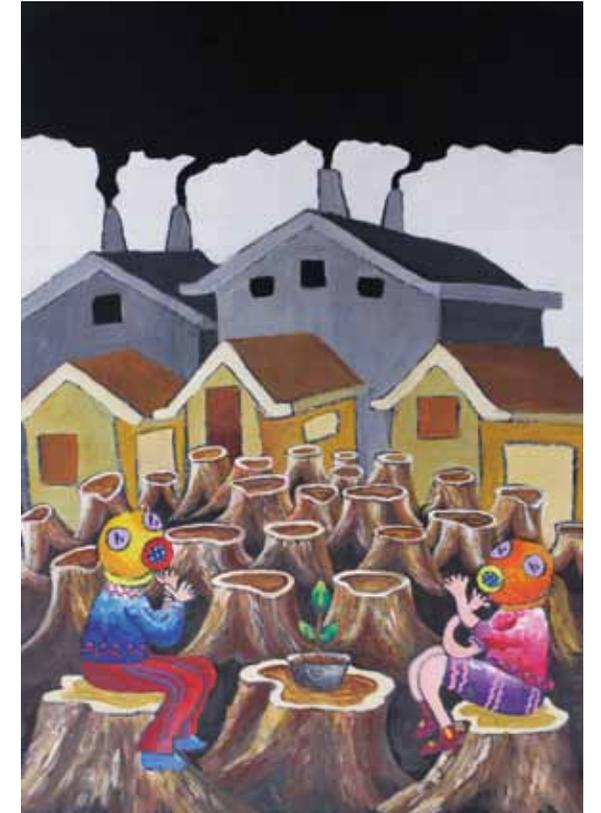
Popoviciu Laura (ルーマニア)



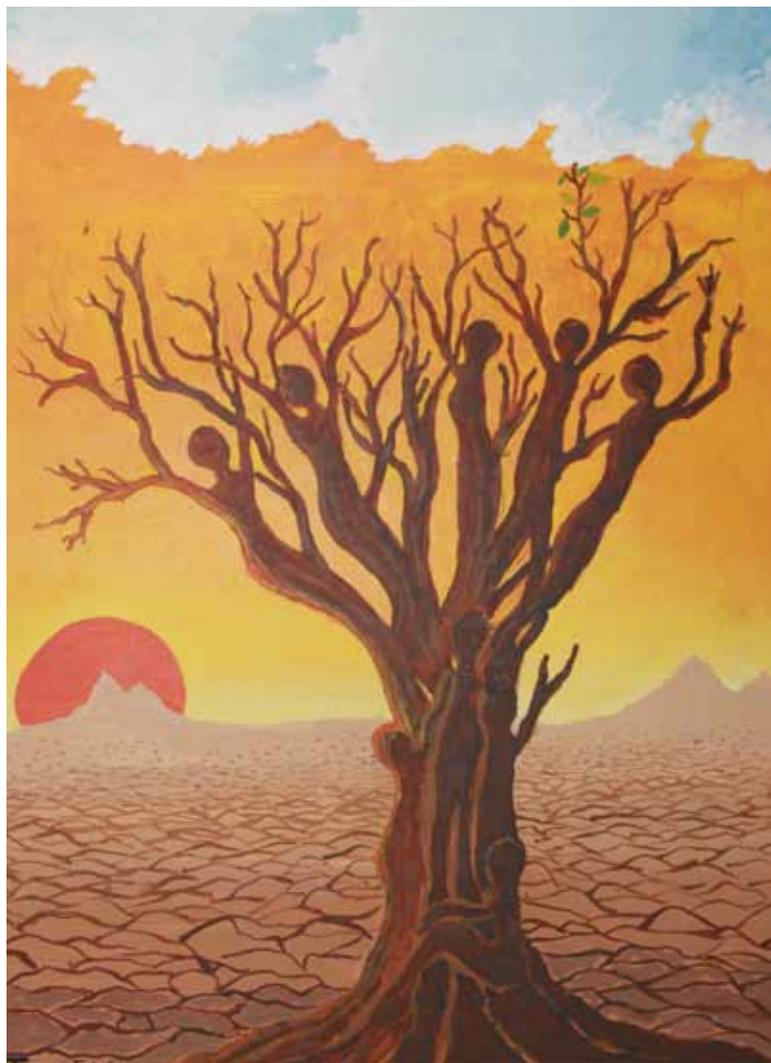
Aukush Kuman Varshney (インド)



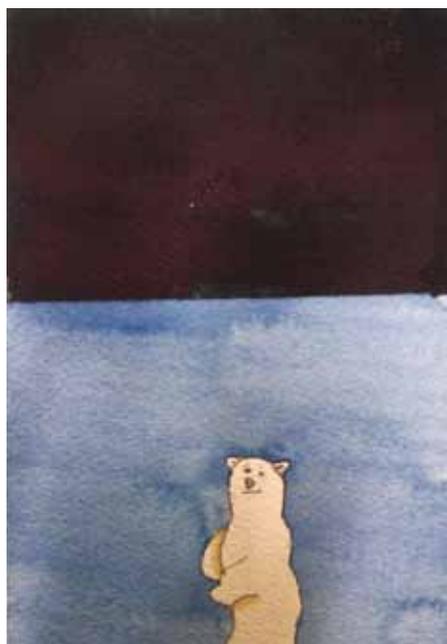
Suzuki Satoshi (日本)



Lia Octavia (インドネシア)



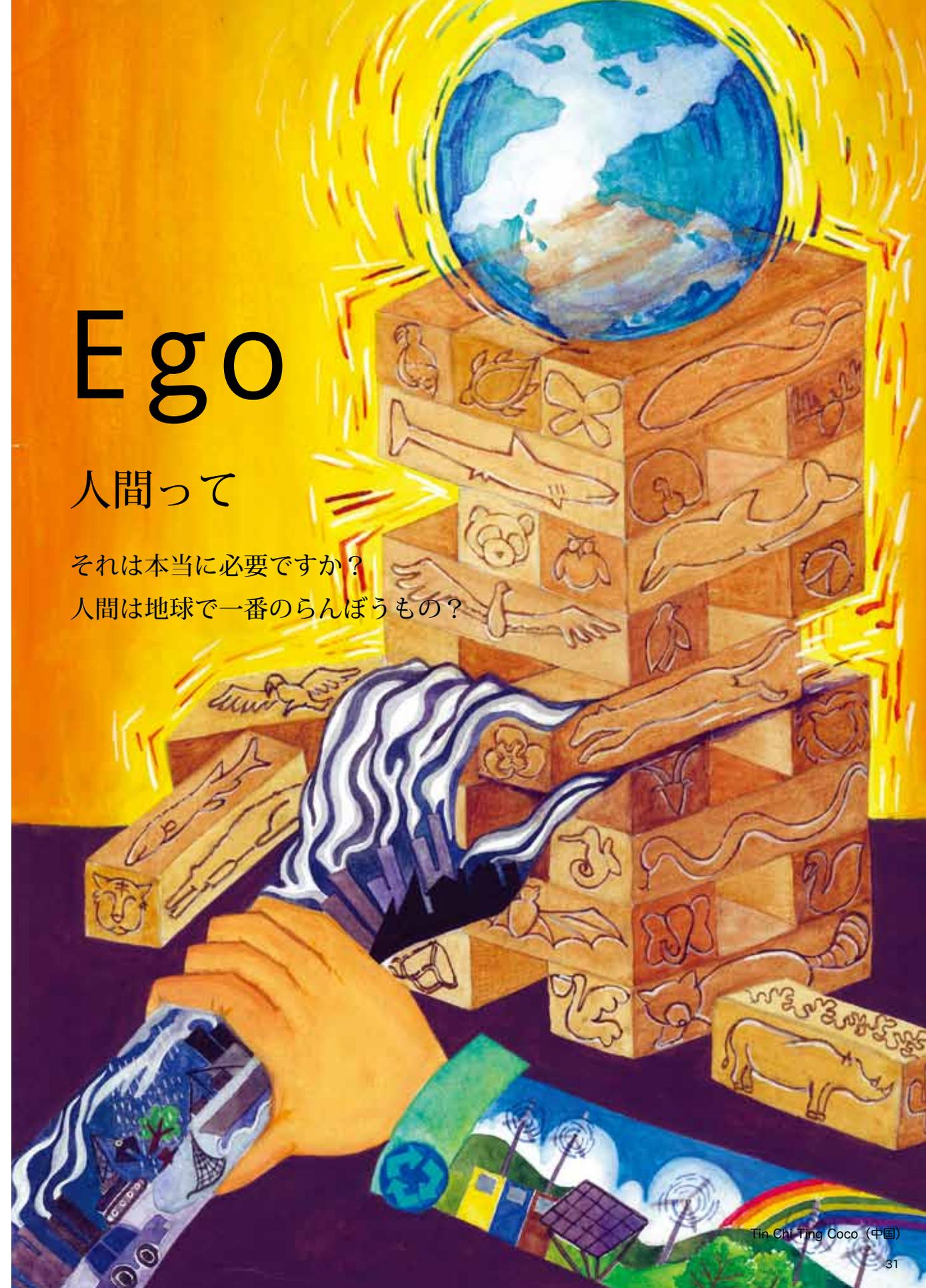
Jose Frias Valentin (メキシコ)



Hugh Gabor (カナダ)



Rachell Gibson O'neill (アメリカ合衆国)



Ego

人間って

それは本当に必要ですか？
人間は地球で一番のらんぼうもの？

Tin Chi Ting Coco (中国)



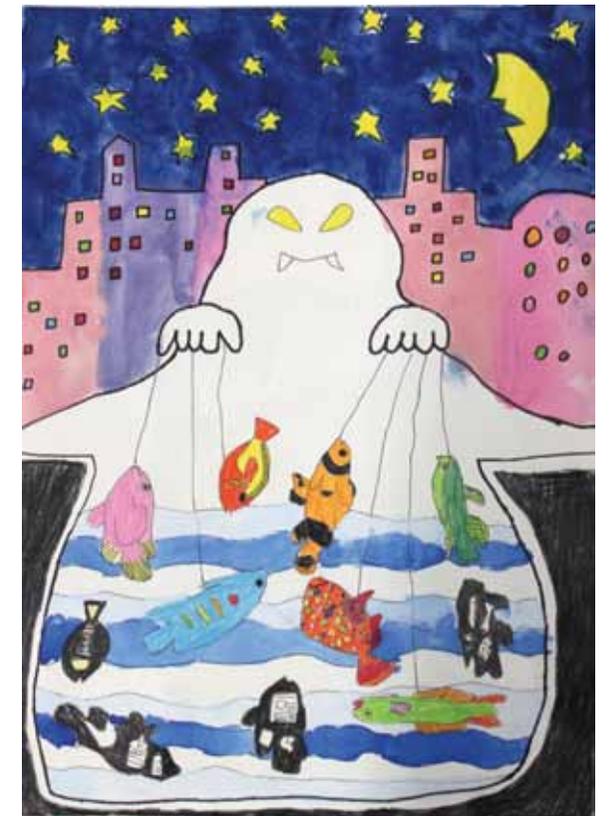
Petr Kratochvil (チェコ)



Marwa Mazher Sakab (イラク)



Jani Lehtimaki (フィンランド)



Kwok Tze Ling (中国)



Ryan Sidiono (インドネシア)



Nur Masri (シリア)



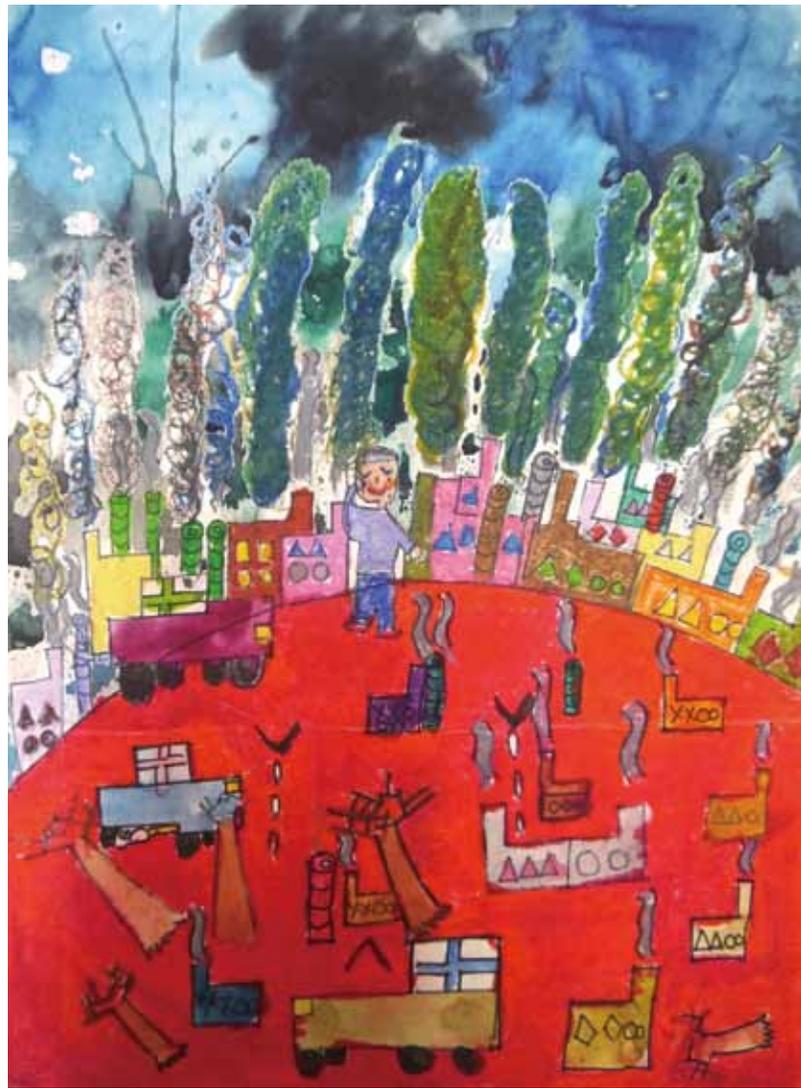
Jessica Lin (アメリカ合衆国)



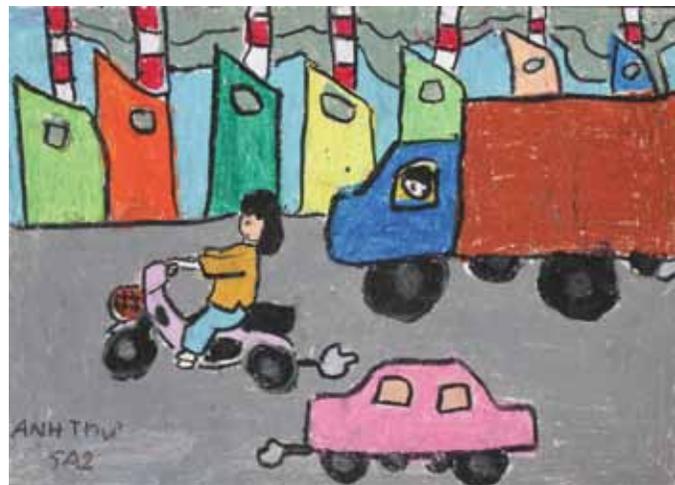
Alma Sirvelyte (リトアニア)



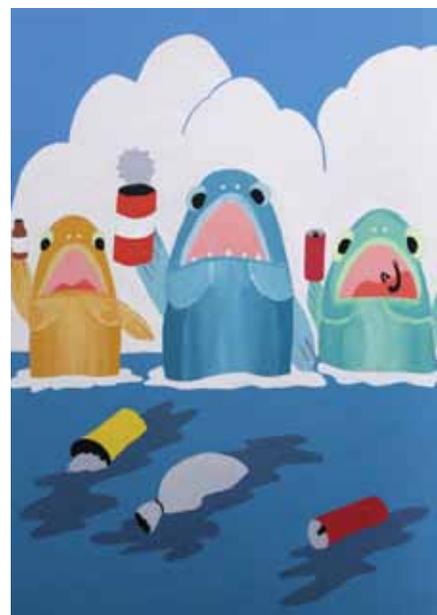
S.Vikram (インド)



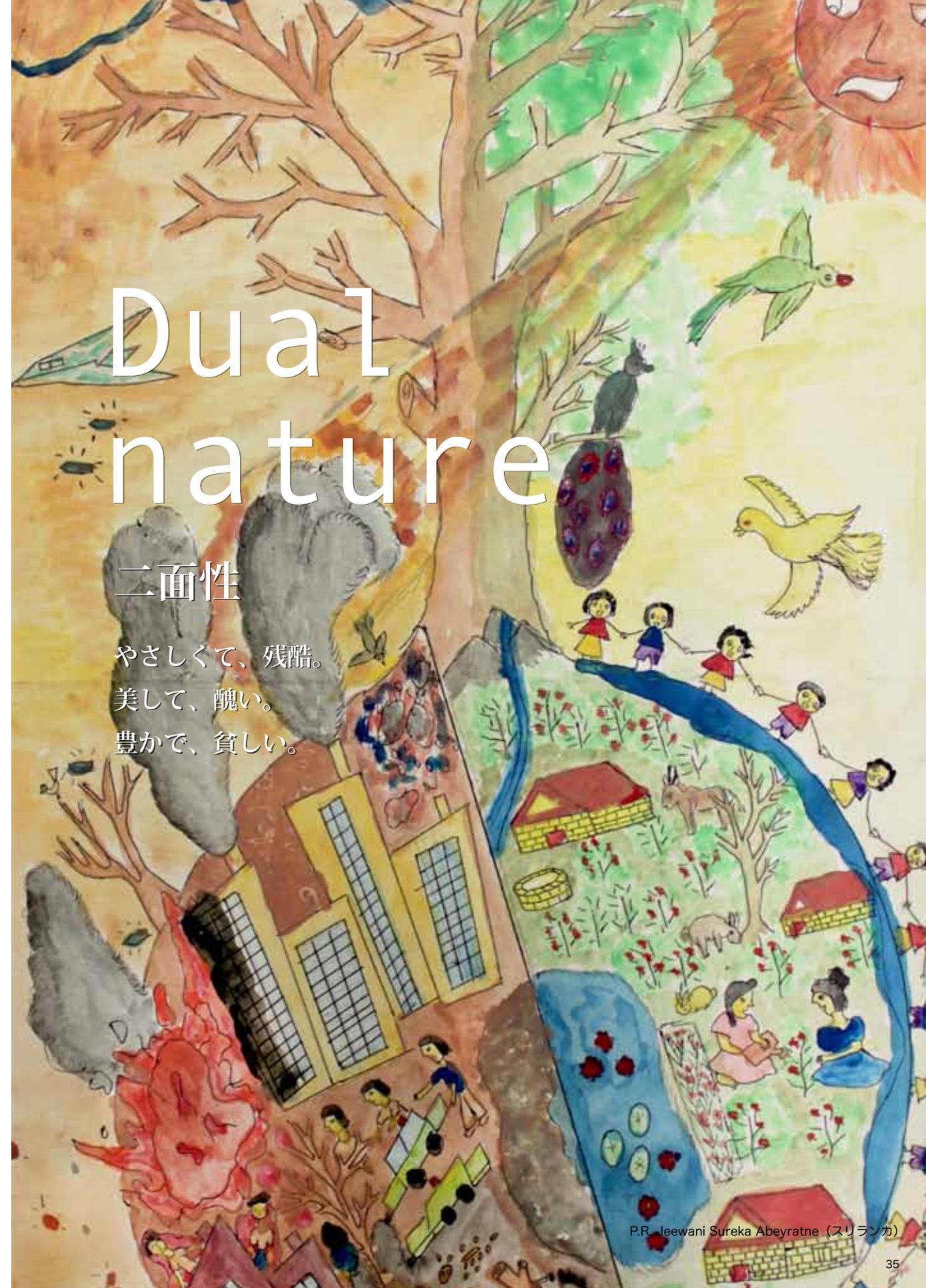
Ga-ram Kim (韓国)



Hoang Anh Thui (ベトナム)



Kondo Yasuhiro (日本)



Dual nature

二面性

やさしくて、残酷。
美しく、醜い。
豊かで、貧しい。

P.R. Jeewani Sureka Abeyratne (スリランカ)



Ludmila Balovnera (ロシア)



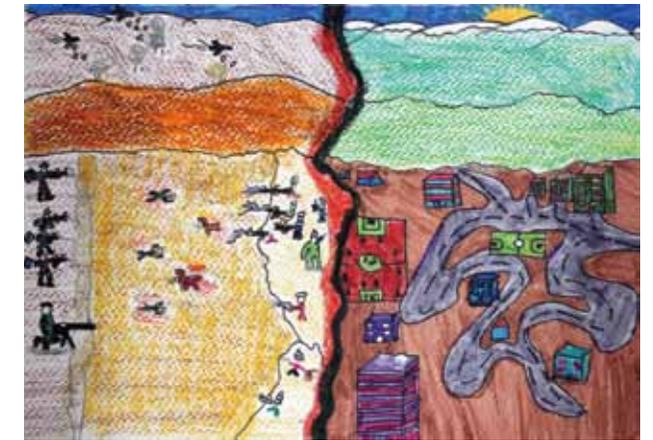
Cheung Fung Wing (中国)



Oliver Pang (アメリカ合衆国)



Kithmini Kumari Wijeratne (スリランカ)



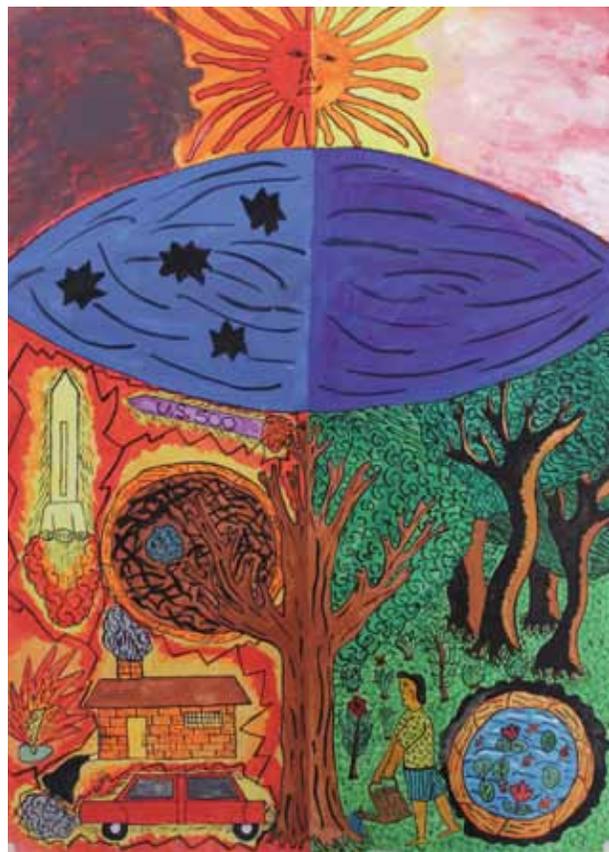
Nalek Jalal Halawami (レバノン)



Ender Kazan (トルコ)



Ravi Jayawardena (スリランカ)



Vishwa Kumara (スリランカ)



Artem Katikalo (ロシア)



Sherief Mahomoud Galal (エジプト)



Revival

元気になって

傷ついた地球。

自分の力で少しでも癒やしたい。

Harisa Tiappho (タイ)



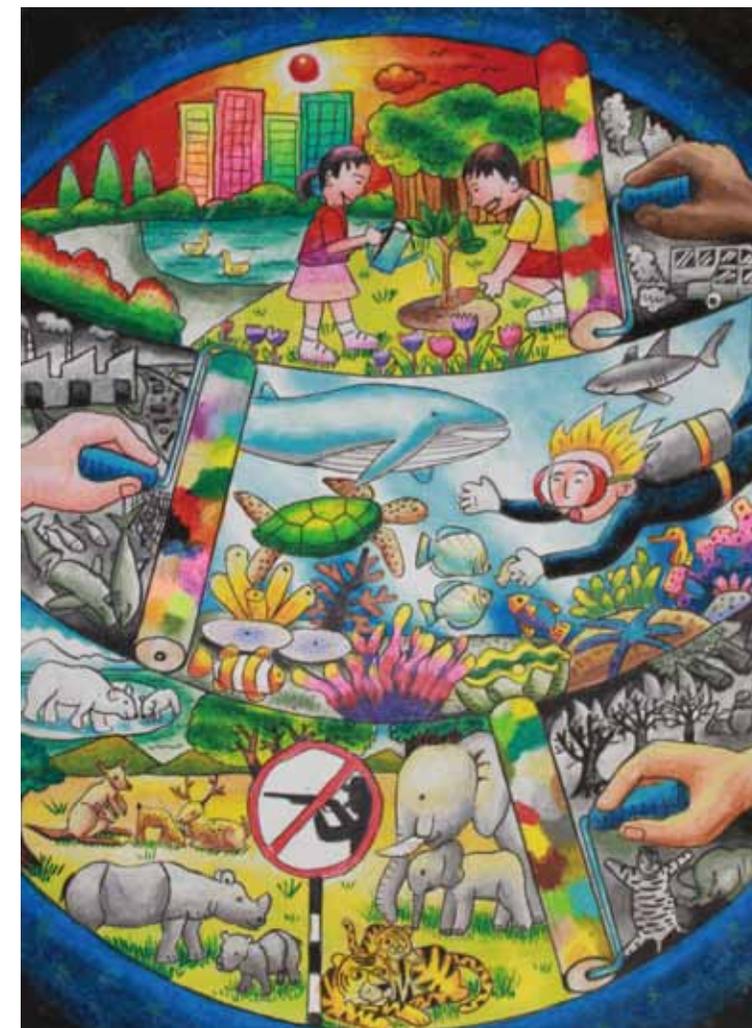
Kalimulin Igor (トルクメニスタン)



Salva.S.Raj (インド)



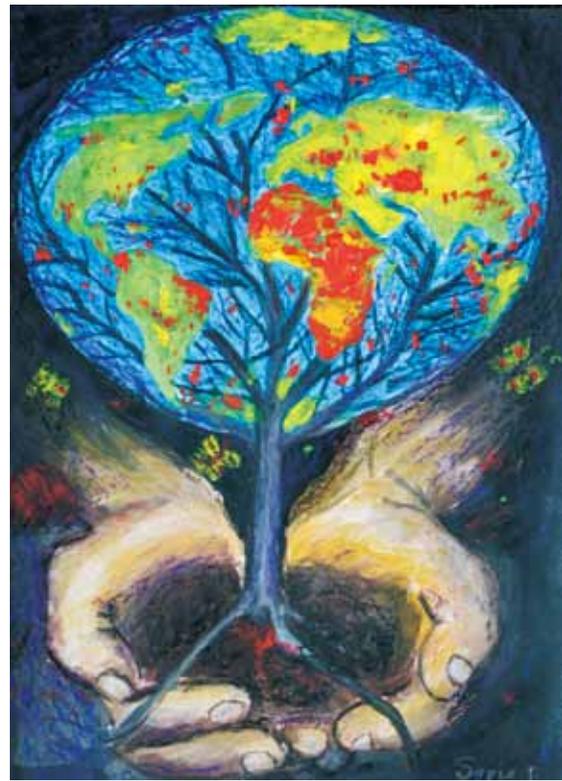
Renzo Marsino Moreno (チリ)



Desmond Cheng Jun Heng (マレーシア)



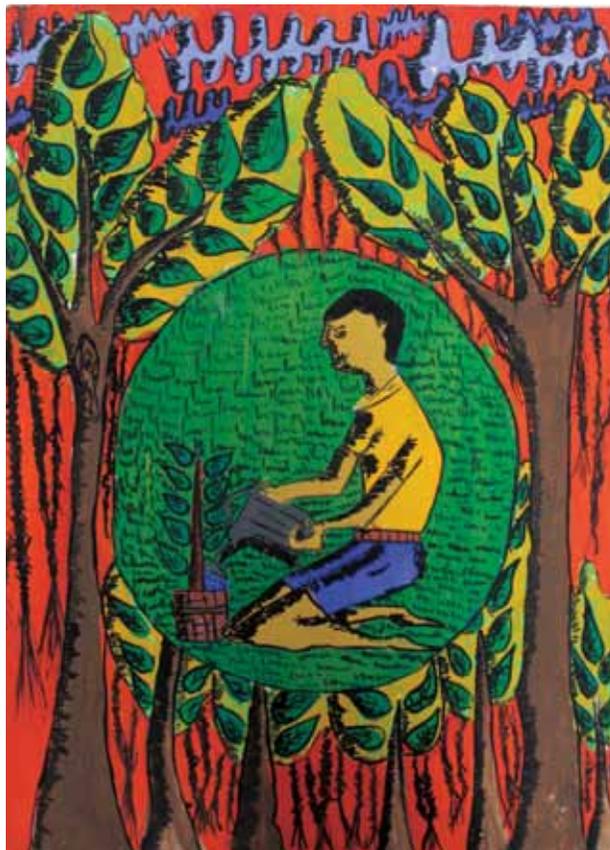
Lisa Roithmeier (デンマーク)



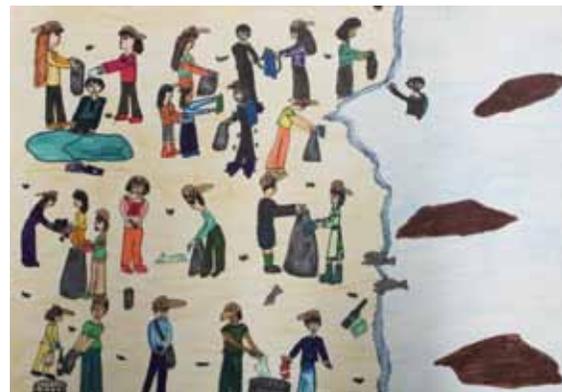
Sofia Dovila Suareo (コロンビア)



Pushpa (インド)



Nipuna Nalith Amarasinghe (スリランカ)



Mona Ali Ali Mohammed (カタール)



Chawanthorn Thirapatanan (タイ)



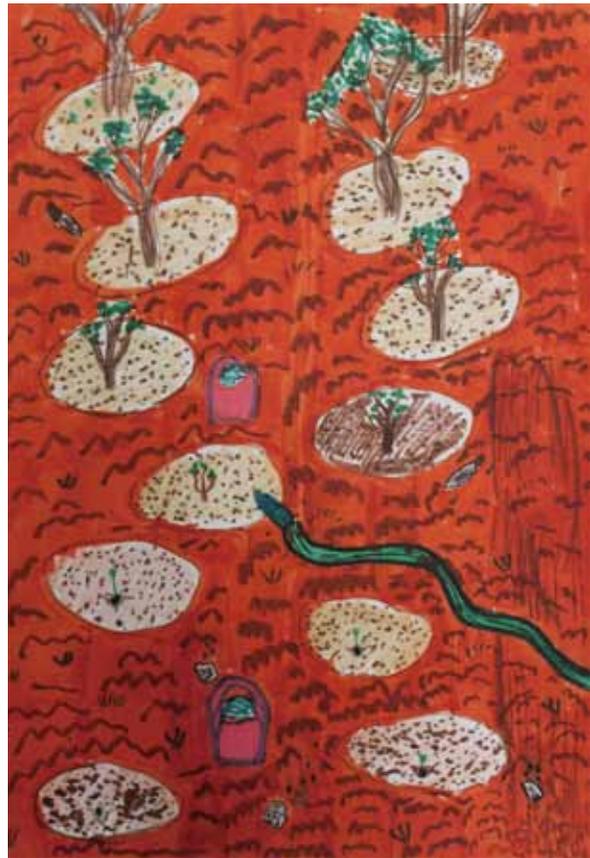
Joel Ahuanari Melendez (ペルー)



Ulises Toruno Gonzales (ニカラグア)



Ampon Youngklang (タイ)



Kate Millen (アメリカ合衆国)

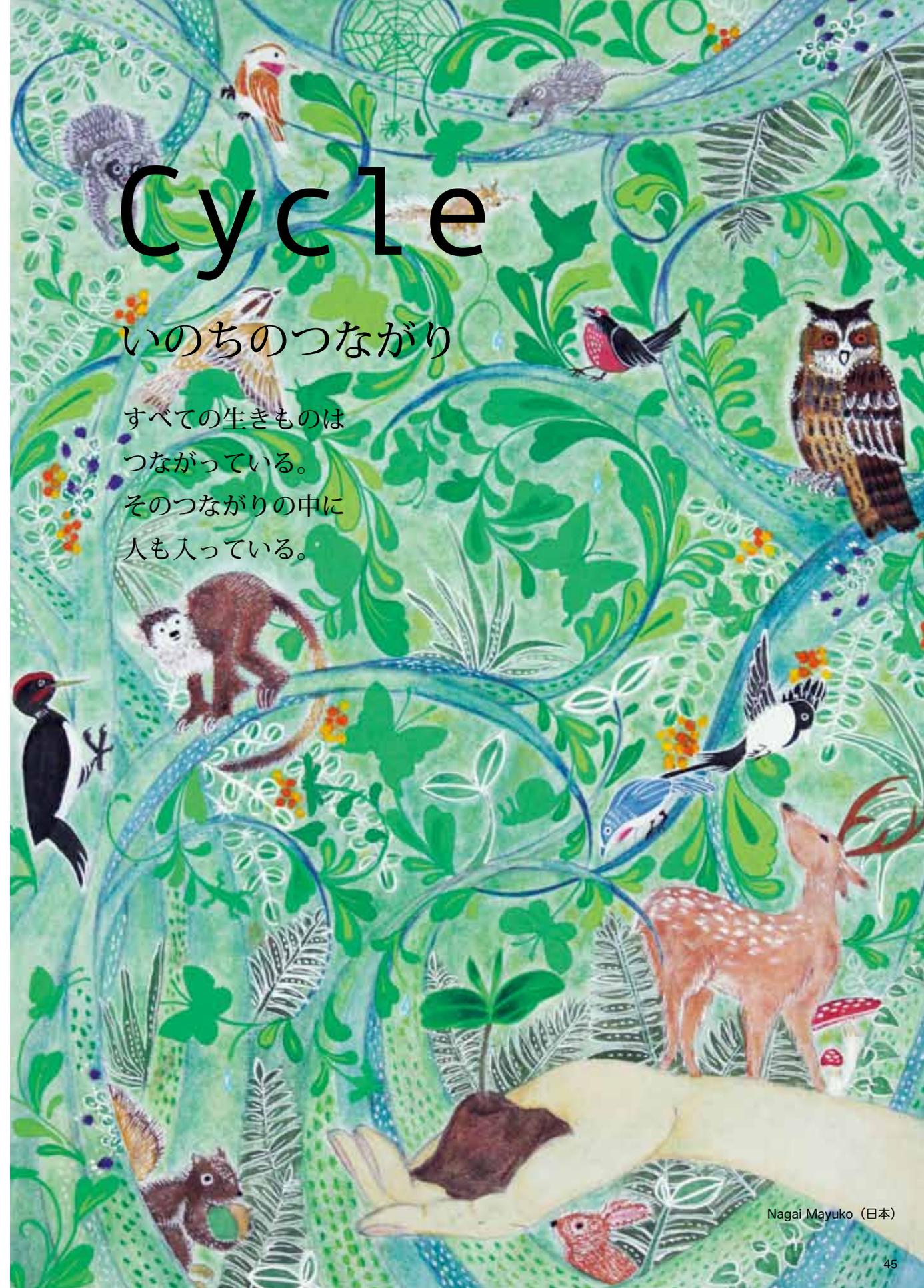


Perju Magdalena (ルーマニア)

Cycle

いのちのつながり

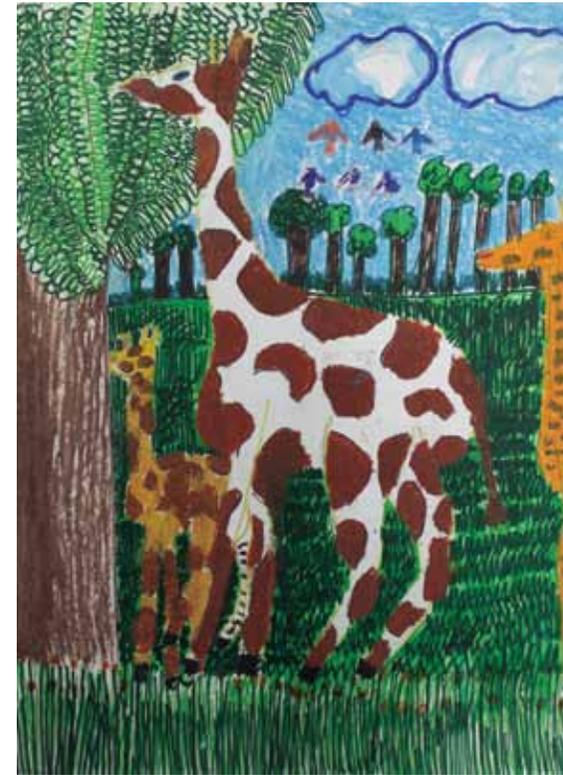
すべての生きものは
つながっている。
そのつながりの中に
人も入っている。



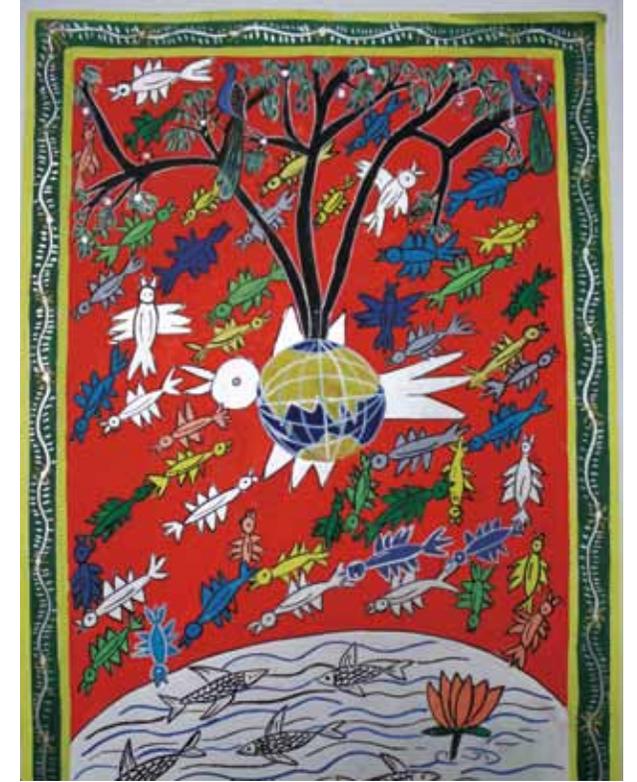
Nagai Mayuko (日本)



Atalanta Shi (カナダ)



Lim Shiang Yin (ルーマニア)



V. Jangaiah (インド)



Kinga Gyeltshen (ブータン)



Tacheva Margaret (ブルガリア)



Kandirra Raju (インド)



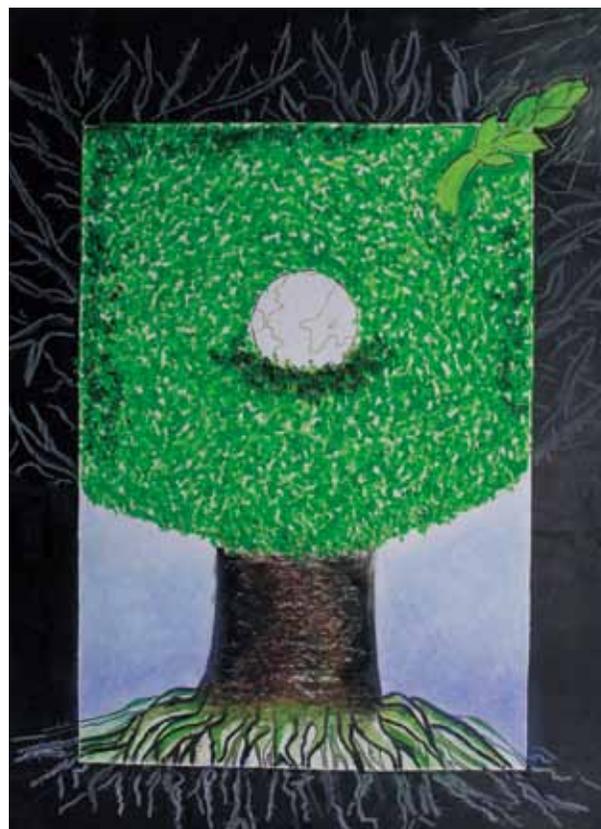
Sumya Rucklanthi Kumanayaka (スリランカ)



Hashimoto Erina (日本)



Dulani Nadishani Wijesatna (スリランカ)



Parastov Khodaparast Haghi (イラン)



Zil Bhupendra Shukla (インド)



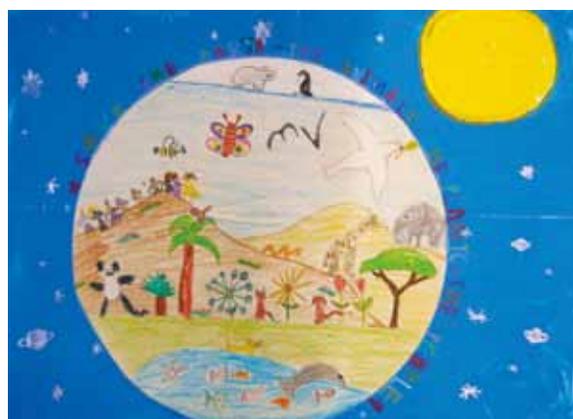
Nanda Soni (インド)



Lenina Lebarikiya (ケニア)



Suchona Kabir (バングラデシュ)



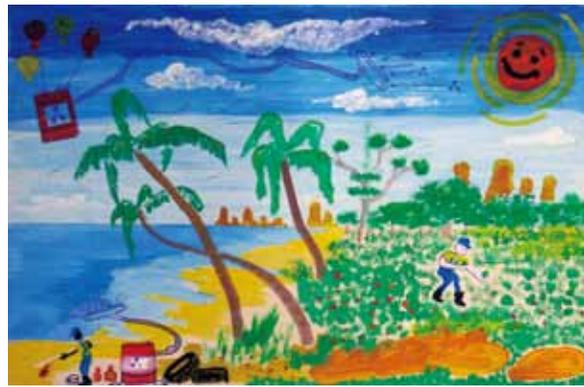
Natasha Attard (マルタ)



Kumari Simran (カタール)



Kanoksri Paluekmoo (タイ)



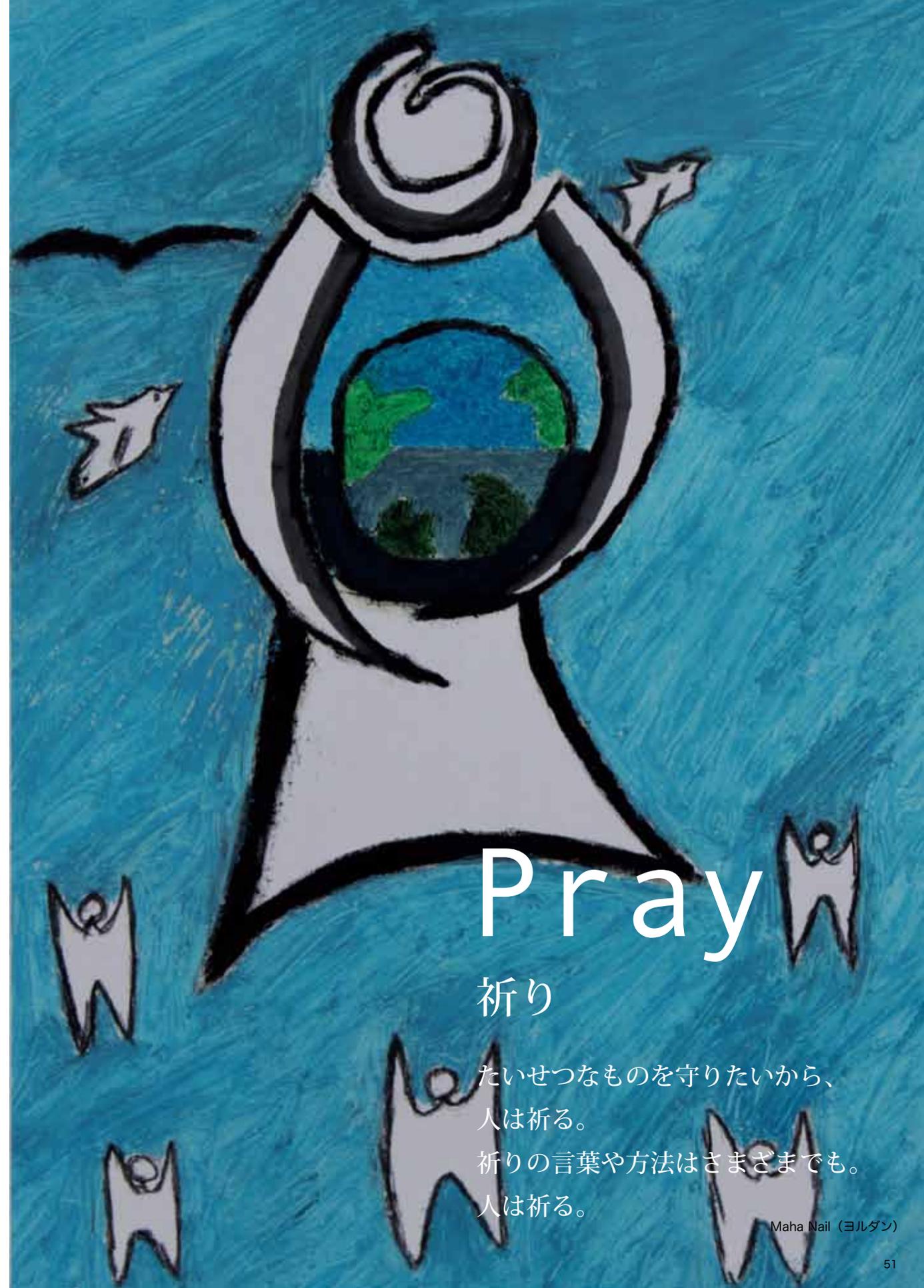
Venegas Ospino (コロンビア)



Julia Sang Oyargabal (ベネズエラ)



Antonova Antonina (ロシア)



Pray

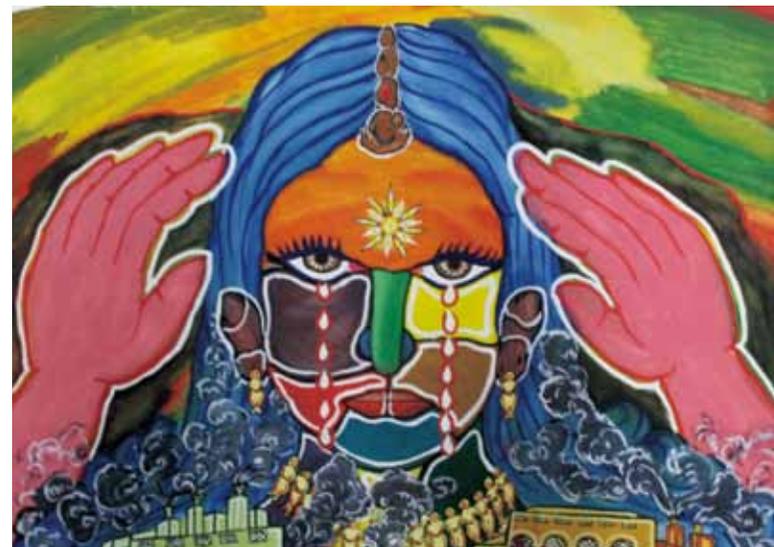
祈り

たいせつなものを守りたいから、
人は祈る。
祈りの言葉や方法はさまざまでも。
人は祈る。

Maha Nail (ヨルダン)



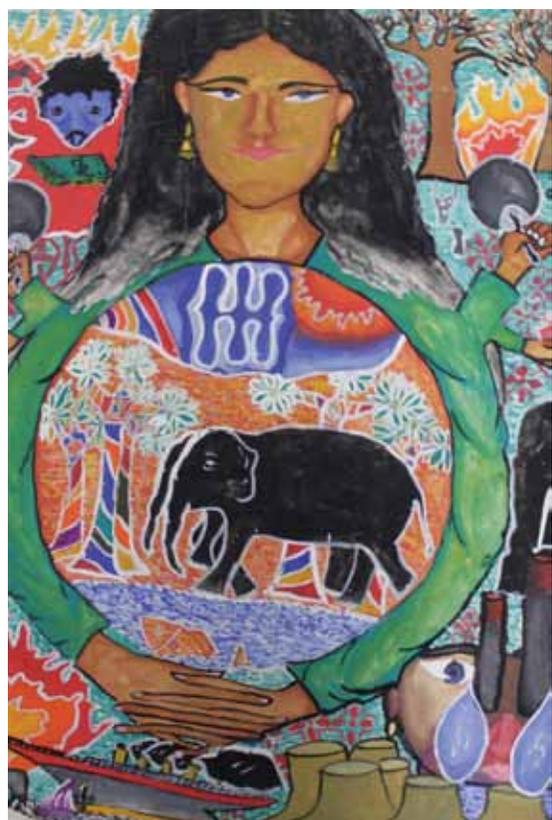
Jana Klementova (チェコ)



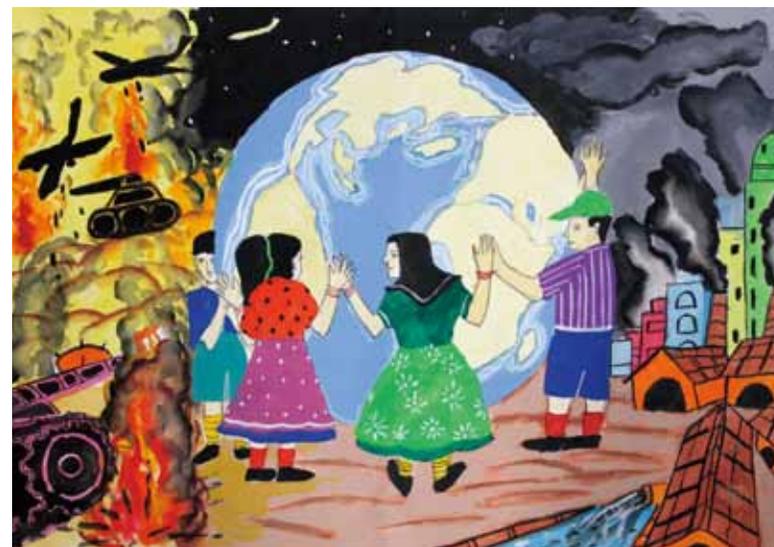
P. Devikumari (インド)



Trisha Co Reyes (フィリピン)



Samitha Madushan (スリランカ)



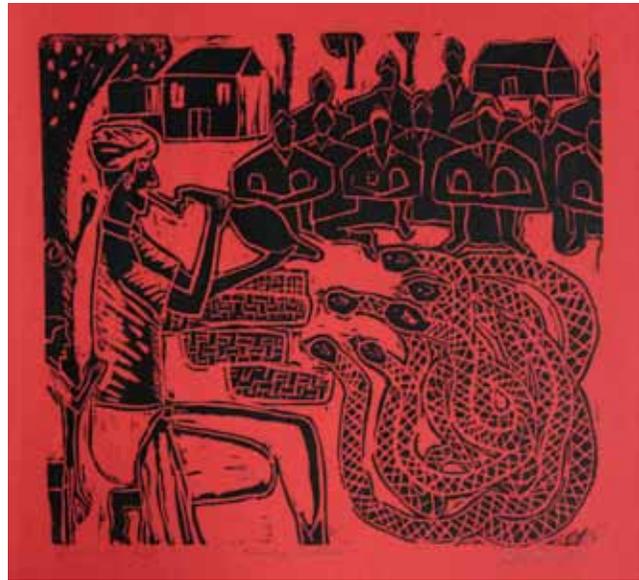
Sneha Balan (カタール)



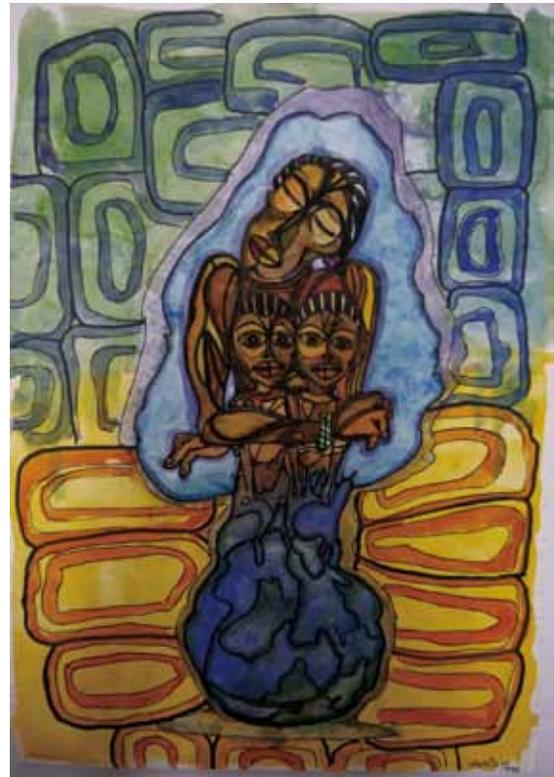
V. Jangaiah (インド)



Emily Cai (アメリカ合衆国)



Ch. Ameet Kumar (インド)



Harish Murthi (ケニア)



Imagination

想いを描く

「何か」を感じ、
「何か」を想い、
「何か」を描く。
ただそれだけのことなんだ。

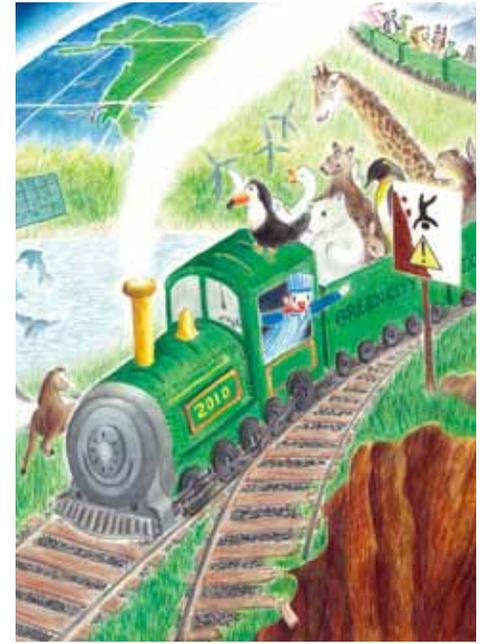
Petra Kuthreiberova (チェコ)



Anzhelika Shabaltus (ベラルーシ)



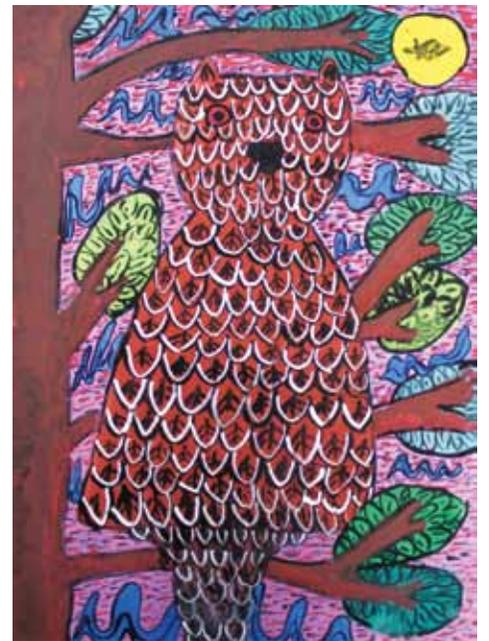
Mahta Bazzaz (イラン)



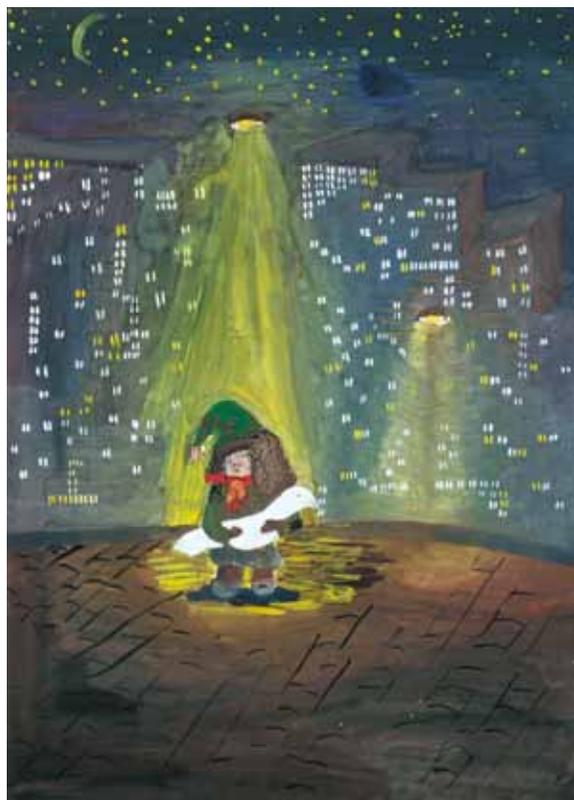
Katherine Z. Liu (アメリカ合衆国)



Roman Zingor (スロヴァキア)



Nipuna Nalith Amarasinghe (スリランカ)



Indre Valanciute (リトアニア)



G.A. Ranil Kalansuriya (スリランカ)



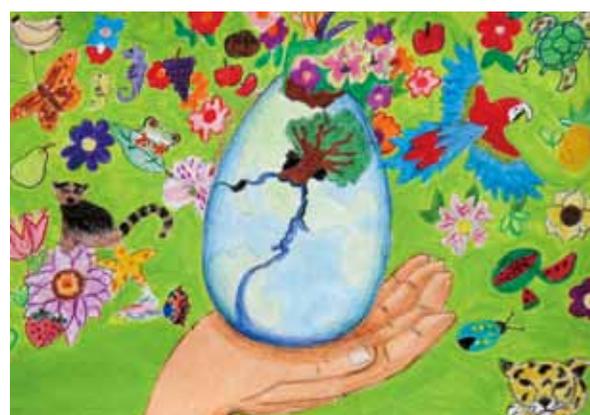
Ruta Nekrasatte (リトアニア)



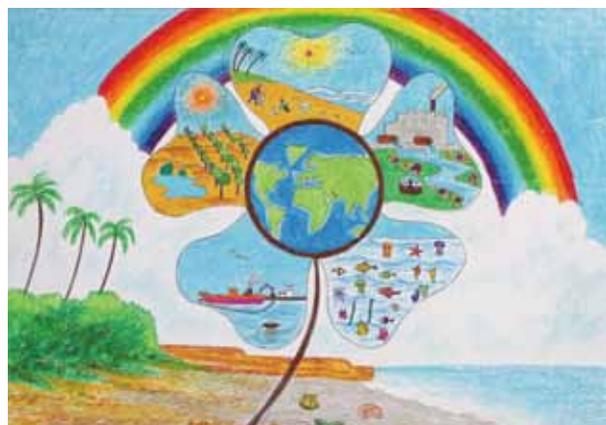
Sergey Mazitov (ウクライナ)



Kristyna Hoskova (チェコ)



Itzani Areli Marin Reyes (メキシコ)



Aheli Gupta (クウェート)



Zeinab Abdull Abdull (バーレーン)



Alexander Vega (エクアドル)



Kousis Bettina (ハンガリー)



Miron Emma (ルーマニア)



Linna Harnnaitham (タイ)



Kanki Junko (日本)



Gloukhova Alexandra (ロシア)



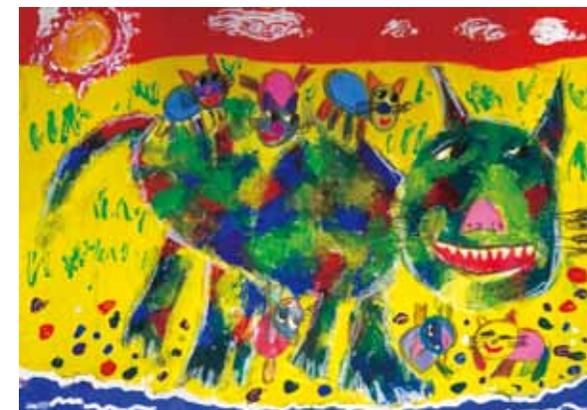
Katarina Koneguna (スロヴァキア)



Roeksana Akiher (バングラデシュ)



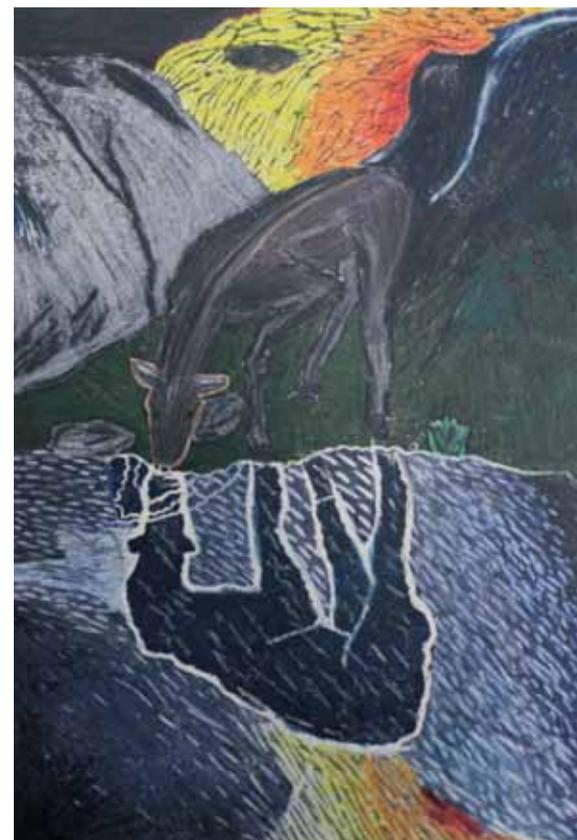
Iacob Ana-Maria (ルーマニア)



Carelyn Josephine (インドネシア)



Agnes Benedek (ハンガリー)



Anna Labusova (スロヴァキア)



Anna Marczin (ハンガリー)



Anaelle Lebon (モーリシャス)



Di Guisti Ilaria (イタリア)



Karolona Nagyova (スロヴァキア)



Daniel Capote Ley(キューバ)



Zeynep Coskun (トルコ)

国連子供環境ポスター WorkShop

国連子供環境ポスターを活用した環境教育活動の実践をご紹介します。子どもたちの絵は、時に私たちに鋭く告発し、時に癒し、ゆく道を問いかけ続けます。これらの絵が、さらに広く愛され、多くの人々の心をつないでいくことを願っています。あなたなら、このポスターをどのように活用されますか？

ワークショップデザインメンバー

研究代表 阿部健一 (総合地球環境学研究所)

ディレクター 飯塚宜子 (地球たんけんたい Labo)

ワークショップデザイン 佐藤優香 (東京大学大学院情報学環)
大西景子 (BOX & NEEDLE)
飯塚宜子 (地球たんけんたい Labo)
三宅由莉 (trois maison)
小林舞 (京都大学大学院地球環境学舎)

ドキュメンテーション 曾和具之 (神戸芸術工科大学)
柴田あすか

展示管理・事務局 菊地薫 (総合地球環境学研究所)

アドバイザー 吉田憲司 (国立民族学博物館)
上田信行 (同志社女子大学)

Workshop Design ❶ 64 - 65
学芸員になってみる

Workshop Design ❷ 66 - 67
カルタをつくる

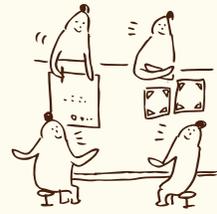
Workshop Design ❸ 68 - 69
つながりをつくる

Workshop Design ❹ 70 - 71
水・草原・森

Workshop Design ❺ 72
絵本をつくる

Listening Together

※ 2008 年度～ 2011 年度の一連のワークショップと展示は、人間文化研究機構連携展示事業として実施しました。



学芸員に なってみる

子どもたちが学芸員となり、国連子供環境ポスターの展覧会をつくる。ポスター作品からメッセージを感じとり、そのメッセージを展示担当者なりの視点で再構成し、他者に伝える。アウトプットとインプットは呼吸のように繰り返される中で経験は深化する。

2009年 立命館小学校（京都）

2010年 金沢大学附属小学校（石川）



4 みんなの読み解きを共有する



お互いの読み解きを発表し合うことで、相違点や新たな視点をミックスさせていった。

読み解く

5 伝えるメッセージを話し合う



グループに分かれ、自分たちの伝えたいメッセージに従い、展示の構成を話し合った。

6 説明パネルをつくる



自分たちで決めた展示計画に従って、展示の説明パネル、キャプションをつくった。



金沢大学附属小学校では、絵にタイトルをつけ、その由来を作者に向けた手紙として記し、これが絵のキャプションになった。

伝える

1 学芸員の誕生



学芸員として自覚するため、学芸員と書かれた名札と白手袋を渡し、課題を告げた。

3 絵と対話する



「この絵の中では何が起きているの？」
「この絵のどこを見てそう思ったの？」
「この絵をかいた人は何を伝えたいのだろう？」
ワークシートの質問にそって、絵からメッセージを引き出した。

2 絵を1枚選ぶ



タイトルや説明がない絵と向き合い、その中から気になる1枚を選び出した。



出会う

8 展覧会

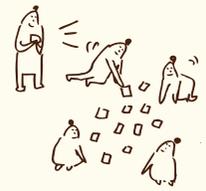


展覧会では、ポスターの絵の鑑賞と同時に、子どもたちが考えた展覧会のメッセージと活動そのものに関心が向けられた。

7 展示をしつらえる



手袋をはめ、丁寧に絵を扱いながら、展示ボードに貼付けていった。



カルタをつくる

国連子供環境ポスター作品を絵札にし、作品のメッセージを読み解き、対応させた文字札をつくり、日本の伝統的な遊び道具であるカルタをつくった。

どの国の子どもたちも等しく自分たちがつくったカルタでの遊びを楽しんだ。

- 2010年 日進市立西小学校 (愛知)
- 2010年 河合町立河合第三小学校 (奈良)
- 2010年 金沢大学附属小学校 (石川)
- 2011年 エイトリアムスクール (ボストン)
- 2011年 森と草原の地球教室 (愛知)

1 絵の中に描かれているものを教え合う



1枚の絵をみんなで見て、どのような絵なのか、絵の中には何が描かれているのかを、目隠しをしている人たちへ教えた。

2 絵を1枚選ぶ



気になる絵を1枚選んだ。

4 絵の作者の住む町を知る



自分が選んだ絵の作者の住む場所はどこなのか。世界地図で指さしながら、地球研のメンバーや訪れたことのある大人がその様子を伝えた。

3 絵と対話する

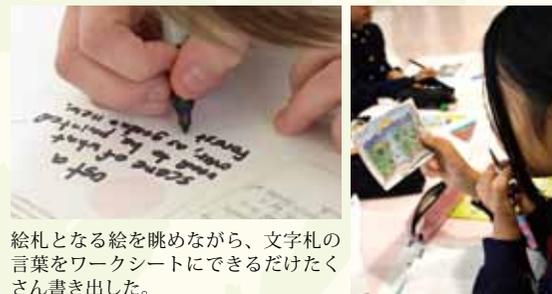


「この絵の中では何が起きているの?」「この絵のどこを見てそう思ったの?」「この絵をかいた人は何を伝えたいのだろうか?」自分と向き合うために、ワークシートの質問にそって、絵からメッセージを引き出した。

5 カルタの文字をくじ引きする



6 文字札のアイデア出しをする



絵札となる絵を眺めながら、文字札の言葉をワークシートにできるだけたくさん書き出した。

7 文字札を仕上げる



8 カルタゲーム



自分たちでつくった世界に1つだけのカルタに、どの小学校の子どもたちも熱狂した。

Environmental
KARUTA

Workshop Design ③

つながりをつくる

国連子供環境ポスター作品にタイトルをつけることで、その作品は、もはや人のものではなく、その人にとってかけがえのないものになる。
かけがえのないものが媒介し、横にいる人とも、遠く離れた人ともつながることができる。

2013年 国際コモンズ学会北富士大会（山梨）

自然の恵みを「共有」する論理や知恵を議論するコモンズ研究者。「1つの地球」「わかちあう豊かさ」を訴えかける子どもたちの絵にインスパイアされた研究者たちは、お気に入りの1枚について、世界について、多くのメッセージを綴った。



富士北稜高校の生徒たちが挑戦したのは、絵から詩をつくるワークショップ。



O SU SO WA KE Workshop

国際コモンズ学会の開催地である富士吉田市は、富士山の裾野にある、昔から自然の恵みの多くを共有してきた土地。プレイイベントで集まった地元の人々に、学会に訪れる世界 57ヶ国 600人の研究者一人一人に向けて、自分たちの村のよいところ、おすすめを綴ったお裾分けカードをつくった。開催地の人々と研究者たちをつなぐ試みは、自分たちのいいところ探しにつながり、シェアすることによって増える幸せを実感できるものだった。



2011年 ボストンチルドレンズミュージアムお正月イベント（ボストン）

ボストン チルドレンズ ミュージアムで毎年行われる「お正月イベント」は獅子舞、和太鼓、墨流し、お餅つき、茶道、福笑いなどの日本文化に触れる、イベントが行われる。その中でカルタ・ワークショップが実現した。



ミュージアム内にある「京の町家」の座敷で、カルタ遊びを行った。ここでは、日本で行ったワークショップで子どもたちがつくったカルタをもとに作成した英語版のカルタを使用した。



国連子供環境ポスターの原画をコーナーに展示。まずは原画の美しさに触れてもらった。



100枚のカードから好きな絵を選んでお土産として持ち帰った。



絵にタイトルをつけてもらった。



AからZまでのアルファベットボードの穴埋めゲームのように、自分の書いた文字札と選んだ絵札を、埋めて行った。

2012年・2013年 子ども霞が関見学デー（東京）

「子ども霞が関見学デー」は、子どもたちが親の職場を見学することを通して、親子のふれあいを深め、広く社会を知る機会とする試み。文部科学省内を訪問した子どもたちを対象に「子どもの絵で世界一周！」ワークショップを行った。中東、アフリカ、南米…今まで知らなくても、自分のお気に入りの絵が描かれた地域と分かると、身近な国名になる。時にはテレビのニュースでしか知らない紛争や災害が、現実のものとして描かれている。1枚の絵やお土産のカードが、この子はどんな暮らしをしているのかと想像するきっかけになった。





水・草原・森



国連子供環境ポスターの中に描かれる「水」「草原」「森」。
会議やイベントのテーマに沿って、作品のモチーフをテーマ毎にセレクトし、
そこに参加する人たちの想いを深めるきっかけとした。

2012年 同志社小学校（京都） 2012年 第6回世界水フォーラム(マルセイユ)

世界の水問題を扱う国際会議、世界水フォーラム（WWF）の会場において、世界の子どもたちそれぞれの暮らしと水を感じとるワークショップを実施。一枚の絵を見て、フランスと日本の子どもたちが、感じたことを「ザザー」「ジャッパン」「ポトツ」などのオノマトベにし、それぞれの水への感覚をわかちあった。水の少ない地域に住む子どもは、水道をひねると「ポトリ」と少量の水が出てくるイメージを話してくれた。



どんな音が聞こえてくるかな？



子どもたちが感じた水のオノマトベが絵のタイトルになり、タイトルをつけた子どもの写真と共にキャプションとして展示された。

SOUND of WATER Workshop

水は子どもたちも含め、みんなのものであることを共有し、
笑顔になるワークショップ



カラフルな墨を使い自由に水を表現した。



自分たちが描いた絵の好きなところにフレームをあてて切り抜く。



切り抜いた絵にオノマトベのタイトルをつける。



閣僚級会議に参加する各国代表に、絵のタイトルをつけてもらうようお願いする子どもたち。



会場に少しずつ水の絵が増えていった。



いろんな国の人たちの言語によって水の音が表現された。

2011年 「森と草原の地球教室」 @愛知県立大学、モリコロパーク（愛知）

体験から生まれる生きる知恵。葉や枝や石などの自然素材で家や楽器をつくる「ものづくり」や、モンゴル、ネパール、カメルーン、アイヌの森を草原の暮らしを体験するなどの一連の学びの中で、世界の子どもたちが描いた森と草原の絵から、大好きな1枚を選び、カルタをつくった。この愛・地球博の理念を継承する「国際森林年」の体験プログラムには2日間で1500人が参加した。



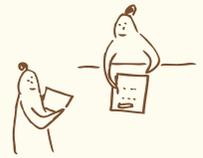
カメルーンのカバ・ピグミー族のように、葉っぱのおうちをみなで作るなどの体験型イベントの一環として、子どもの絵のカルタワークショップを実施した。



COP10での展示と交流

愛知県日進市立西小学校児童がつくったカルタは、2010年10月、COP10（生物多様性条約第10回締約国会議）の会場内ブースで展示された。西小学校児童はその後、修学旅行で総合地球環境学研究所を訪れスピーチとともに「MIDORI～繋がる環」を熱唱、折しも国際会議中の各国研究者らに感銘を与えた。





絵本をつくる

国連子供環境ポスター作品のメッセージを読み取り、そこからまた新たな物語が紡がれた。

2011年 国立台東大学附属小学校（台東）

台湾の国立台東大学の児童文学を研究する大学院生たちによって企画されたワークショップ。グループに分かれ、ポスター作品の読み解きからキーワード出しを行い、ポスター作品を並べて物語を紡いだ。



1 枚好きな絵を選んだ。



4 グループに分かれ、自分たちの選んだ絵を並べ、まず主人公を決めるところから絵本づくりがはじまった。



2 選んだ絵をじっくり見てワークシートに記入しながら読み解いた。



3 when why where who を絵から読み解き、見つけたものをポストイットに記入しワークシートに貼っていった。



国連子供環境ポスターを使用した絵本作品。



6 選んだ絵に物語を書いていき、絵本の試作版をつくった。



5 話し合いの中から口頭で出たストーリーをリーダーが書きとめていった。



7 タイトルを決め、本紙に自分たちの挿絵も追加し製本を行った。

台湾と日本の小学生たちの出会い

台東大学附属小学校の子どもたちは、その後環境学習と国際交流を目的とした研修を企画し、翌年2012年に総合地球環境学研究所を訪れた。また同志社小学校（京都）の生徒たちと防災や環境をテーマにした交流活動を行った。



鑑賞教育から始まる3つの学び

佐藤優香（東京大学大学院情報学環特任助教）

一枚の絵をじっくり見る、自分の読み取りをもとにコミュニケーションするという「子どもがつくる国連環境ポスター展」ワークショップの活動は、鑑賞教育の一手法といえるでしょう。しかし、このワークショップはそれ以外にも、多くの学びの可能性を内包しています。たとえば、コミュニケーション力、言葉による表現力の育成があげられます。また、総合的な学習の時間のテーマとして取り上げられることの多い次の3つの学習に寄与します。

環境教育

国連子供環境ポスターは、世界の子どもたちが環境について感じたこと、伝えたいことが表現されています。しかし、その読み取りに正解があるわけではなく、また環境について多くの知識を保持することを要求することはありません。絵はどれも、見るものが地球環境についておのずと考えるように描かれており、絵の中の様子をつぶさに見ていくことで、誰もが自己の視点で絵の中の出来事を読み取り、メッセージを編むことが可能となっています。子どもたちは、絵の向こうにいる自分と同じ年代の作者の思いを意識し、また第三者へとその思いを伝えるという活動を通して、環境問題を他人事ではなく自分の問題として捉えることができます。

国際理解教育

このワークショップで、自分の選んだ絵がどこの国や地域のものであるかが子どもたちに伝えられるのは、活動全体の終盤になってからです。その国名には子どもたちに馴染みのないものが多く含まれています。しかしながら、絵をじっくり見、描き手のことを慮り、その代弁者になる活動は、描き手とながっているということを自ずと育むということが、子どもたちのコメントから読み取れます。どこにあるどんな地域のことかはわからなくとも、地球上のだれかと深い関わりを持ったことが実感されていました。だれもがいろんなことを考えていること、遠く離れた場所にあっても共通することがあり共感し合える思いのあることに気づくことが、一枚の絵を介して可能となるのです。また絵は、使われている紙の質感にも、色づかいにも、なにかその地域らしさがあり、日頃よく目にする日本の子どもが描いたものとは違う印象を与えます。ポスター全体が持つ個性が文化的背景を伝えてくれているのです。様々な地域の子どもが描いた絵を使うことで、自ずと国際理解がはまります。

情報教育

活動の中には、情報の受け手としての立場、送り手としての立場の双方が含まれており、子どもらは、それぞれの立ち場から絵や社会と向かい合うことになりまます。一方的に絵を解釈するだけでなく、その解釈について子どもたちで吟味する機会（グループによる絵の分類）や、描き手に問う姿勢（手紙）を持つことで、情報の背後にある人や社会、また表象の対象となるものへの真摯な姿勢が育まれます。また、情報を受け取り、伝えることの難しさやあやふやさも全てのフェーズの中で感じることができます。



ワークショップで育む「共に生きる」感性

飯塚宜子（地球たんけんたい Labo）

「すごい」。国連子ども環境ポスターを見る人が、たいいてい発する最初の言葉である。想像したこともなかった遠い国や地域の子どもたち。その子どもたちの心の奥底にあるものが、目の前にある。それらは強く、時に静かに、私たちの心を揺さぶり、語り続ける。「ぼくたちはかけがえのないこの地球の上で、生き続けたい」。この類いまれなるコレクションを活用した環境教育活動は「ワークショップ」という手法で行っている。

1つの正解を求めない学び

アート、まちづくり、企業研修、学術会議、環境教育など、今日、さまざまな分野の多くの人々が、「ワークショップ」を実施している。ワークショップは「工房」である。1人ひとりが自分の身体とところを使い、その人にしか創れないものをつくる。ファクトリー「工場」で1つの設計図に則って、同じ規格のものを大量につくるのではない。

私たちは、1つの正解を教わることに慣れ過ぎ、誰かが解決策を教えてくださいとを待っていないだろうか。世界では紛争、気候変動、人権、経済格差、環境破壊など、根の深い問題群が広く複雑に絡み合い、優秀な専門家や政治家も1つの正解を示すことは出来ないというのに。北米先住民の口承史は、困難にあたった人間は、輪になり座り、お互いを傾聴する中で、生きのびる知恵を出し合ってきたことを教えている。日本人も、寄り合い、講、結、などの集いあい、語り合う伝統を持っている。世界中で人間は、長い歴史をそのように生きのびてきたのかもしれない。

ワークショップは楽しい。それは人間にとって「根源的な喜びを内在」*した方法だからだ。自分の身体や心で感じたことを、受け入れてもらえる安心感の中で言葉にする。聴き合い、お互いを認め合い、つながりあい、新しい発想や気づきを生む。それはシンプルで確かな平和や平等の方法でもある。

*中野民夫『ワークショップ—新しい学びと創造の場—』岩波新書(2001)



この地球に「生き続けたい」と語りかける子どもたちの絵と共にある場合は「ワークショップ」であると私たちは考えるのである。

つながりと多様性

世界中の子どもたちの絵は、彼らが生きてきた地域の自然環境、社会情勢、文化などが想像を越えて多様であることも教えてくれる。テレビでは他人事のように見えた、馴染みの薄い宗教や文化のカタチも、子どもたちの目を通して、その手によって素直に描かれることで、その抜き差しならない「かけがえのなさ」が心に染みてくる。自分と異なる多様性を受け入れる回路が開くのである。それと同時に「同じ地球にいる」ことが、現実として腑に落ちてくる。普段の生活の中では見えにくい、多様な地域、多様な自然、多様な社会情勢の中に生きる子どもたちと、同じ地球の上でつながり、共に生きていることも、ワークショップを通して感じることが出来るのである。

Listening Together

共に読み解くことの大切さを考える

プレイフル・ラーニングの研究者である上田信行氏を交え、企画メンバーと共に改めて国連子供環境ポスターを用いたワークショップのこれまでと経緯と可能性について語りあった対談の記録。
(2011年1月 マサチューセッツ工科大学にて)

審査会の楽しさを

阿部：このプロジェクトをはじめようと思ったきっかけは、「国連子供環境ポスター原画コンテスト」の存在です。全応募作が2008年に僕の所属する総合地球環境学研究所に寄贈されました。世界の子どもたちが描いたポスターを倉庫に眠らせておくのは、あまりにも勿体ない。毎年、僕はこのコンテストの審査会に出ますが、それがとても楽しい。審査員はたくさん絵の中から好きな絵を選んで、その絵のどこがいいのかということとを話し合います。なぜこの人はこんな絵を選ぶのか最初はわからないけど、説明を聞くとなんかほっとする。こういう意見の交換が楽しい。こんな楽しいことを子どもたちにも体験させてあげたいと思い、ワークショップの実践を多くされている佐藤さんに相談したんです。

三宅：つまり、このプロジェクトは宝の発掘作業なんですね。倉庫に眠っている世界の子どもたちのメッセージを発掘したい。そして、絵をみる子どもたちの中にある潜在的な読み取り、発信する力を発掘したい。この両方があるように思います。

阿部：そう、それを宝だと思う人がいないと宝に見えないものなんです。僕たちは宝を見つけた！だから、これが宝であるということを、みんなに伝えたくて、こんなプロジェクトをやっているんですね。

目的は一つではない

上田：このプロジェクトのミッションは、大きく2つありますね。一つは環境というテーマを子どもたちに

のように伝えていくかということ。もう一つは、オブジェクトを媒介にして物事を深く見るという楽しさみたいなものを伝える。ということです。しかし、2つのミッションは並列ではないんですね。環境教育というのは教えられるものではなく、自分自身で感じてとっていかないといけないものです。Passive learning 受け身な学びではなく、making な学び、表現して語っていく。語ることを通して理解していくという学びのスタイルでしか環境のことを伝えていくことはできないと思います。ワークショップでは、曾和先生たちのチームがRTV（リアルタイムドキュメンテーション）*で刻々と起る出来事を映像に残して、最後にこれを見てふりかえってもらいましたね。これは、何かを教えるためのものではなく、その場で起きていた出来事を語りなおすためのオブジェクトなんです。子どもたちが描いたポスターもこれと同じなんじゃないかな。

阿部：なるほどね。このプロジェクトは、環境教育だけでなく、世界の子どもたちが描いた絵から民族性を感じ、それが異文化理解につながるのではないかと、絵をよく見るということから美術鑑賞教育になるのではないかなど、いろんな教育のミッションを掲げることができる。ただ、僕はこのどれかだけで語るものではないなと感じていました。

佐藤：それは、このプロジェクトが一つのコンテンツだけを習得するというものではないからですね。絵から環境のことを学びなさいというのではなく、環境のことを学びなさいというのではなく、そこから自分を通して言葉にしておす、ということが活動の本質です。ワーク

阿部 健一（総合地球環境学研究所 教授）
佐藤 優香（国立歴史民俗博物館 助教）
飯塚 宜子（総合地球環境学研究所）
大西 景子（BOX & NEEDLE）
三宅 由莉（trois maison）
小林 舞（京都大学大学院地球環境学舎）
曾和 具之（神戸芸術工科大学 准教授）

上田 信行（マサチューセッツ工科大学 客員教授）
田中 浩也（慶應義塾大学環境情報学部 准教授 FabLab Japan）
五月女 賢司（国立民族学博物館 研究員）
原田 泰（千葉工業大学 准教授）

*所属は対談が行われた2011年1月時点のものです。

ショップ後の子どもたちの感想をみると、そこから子どもたちは、同時多発的に、さまざまなことがらを学び取っているのが分かります。それは結果的に「環境」について学んでいたりと、結果的に「異文化理解」について学んでいたりとということであって、そのどれか一つが目的ではないんですね。いろんな目的を内包しているからこそ、ワークショップを実施する学校によって、どこにフォーカスをあてるかを変化させることができるんです。例えば、第一回目の立命館小学校では、子どもたちが環境についての取り組みをしていたので、「環境」に焦点をあてて活動をデザインしました。また、金沢大学附属小学校では、担当された先生の研究テーマと子どもたちの一年の取り組みを鑑み「メディアリテラシー」を念頭においてデザインしています。ポスターを読み解き各自がメッセージを発していくことを基本にしながらも、参加する子どもと先生の関心や学習内容によってワークショップのデザインを変え、学びを発展させることができるんです。

「Good」の研究

上田：ハーバード大学では、「Good」の研究が非常に盛んです。全ての教育の目的は結局「Good」「Good Person」「Good Worker」「Good Citizen」をつくることだと言っているんです。このプロジェクトも、これぐらいの次元のところの一つのキーワードがあるといえますね。「Very Good」って言葉をアメリカにいとすごくよく耳にします。

小林：「Very Good」という言葉には、あぶない側面がある気がします。ワークショップの途中では、いろいろ自由に語ってた子どもが、いざカルタの言

「子どもたちがつくる国連環境ポスター展」 ワークショップ関連の冊子と書籍



2009年度、立命館小学校での「学芸員になってみる」ワークショップレポート冊子
発行：総合地球環境学研究所



2010年度、金沢大学附属小学校での「学芸員になってみる」ワークショップレポート冊子
発行：総合地球環境学研究所



2011年度、「カルタをつくる」ワークショップのレポート冊子
発行：総合地球環境学研究所



『日本発 21世紀型教育モデル—つなぐ力が教育を変える—』
荒木貴之 著
本文中で取り組みを紹介
発行：教育出版



『生物多様性—子どもたちにどう伝えるか—』
阿部健一 編著
発行：昭和堂



『協同と表現のワークショップ—学びのための環境デザイン—』
茂木一司、上田信行、
刘宿俊文、佐藤優香、
宮田義郎 編集
発行：東信堂
本文中で取り組みを紹介

葉としてカタチにしていくと「Very Good」って言うてもらえるように意識して書いているように思います。

阿部: 絵としてきっちり描かれているものを選んだ子もいるし、なんでこんな選んだのかな？と傍目に見ていることもあります。それは、僕にとっての「Very Good」、彼、彼女らにとっての「Very Good」がいっぱいあるっていうことかもしれない。

小林: アメリカの方が子どもたちにとっての「Very Good」の幅が日本より広いような気がします。日本の方がいわゆる「上手な絵」を選ぶ子が多くて、アメリカの子どもの方が子どもらしい絵を選ぶことが多かったですね。

田中: アメリカは、気軽に「Very Good」という言葉をかけるからですかね。こちらにいと本当にみんなよく「Very Good」って言うんですよ。

五月女: どんな時にも「Very Good」では、僕は嬉しくない。でも、自分が頑張ってることは褒めてほしいって思う場面ではやっぱりきちんと褒めてほしい。私たちは社会性のある生き物ですから。

佐藤: 「Very Good」という言葉は、慎重に使わなければ、大きな誤解を生む可能性があると感じています。私はワークショップで子どもと関わる時に「うまいね」という言葉を絶対言わないようにしています。「うまいね」も「Very Good」ですよ。このプロジェクトは人からの評価ではない言葉で、説明したいと思うんです。

キーワードは「Listen」

佐藤: このプロジェクトを一言であらわすとしたら「Listen」でしょうか。ワークショップのデザインをするときに大切にしてきたことや、子どもがグッと伸びる部分を一言でいうなら、「Listen」、聞くということにつきると思います。さきほど、ワークショップで子どもたちから最終的に出てきた言葉が、他者から「Good」と評価されるようなものになっていたのが残念だという話がありましたが、日本での実践でも同じこ

とを感じます。たくさんやりとりをし思考を重ねたのに、最後に文字にしたときには型通りの答えみだいになってしまうことが多くありました。けれども、ワークショップが終わってから子どもたちに書いてもらったふりかえりのシートには、「こんなにじっくりと一枚の絵を見たことがなかった」「世界の遠くの国の子どもも自分たちと同じようにいっぱい考えているんだと思った」「絵って伝えることができるものなんだ」などのコメントがたくさんありました。まとめようとして出された表現には、学びは見えてこない。すべてはプロセスの中に十分ふくまれている、それはくりかえされる「Listen」にあったのだと実感します。

田中: 「Listen！」すごく賛成です。作る側から考えてみても、受け止めてくれる人がいるという信頼感が重要ですよ。僕の場合は表現を支援するテクノロジーをつくる分野にいますが、表現を支援することはできても、つくった物を受け止めてくれないとか、誰もみてくれない。そんな悲しさが少しできています。

佐藤: このワークショップでの活動は「表現」からではなく「鑑賞」からスタートしています。まず自分が受け手になるということがこのワークショップのいいところだと思っています。表現の支援として鑑賞があり、鑑賞の支援として表現があるんです。

大西: 私の研究テーマは、まさに「Listen」なんです。「聞く」というのは相手を思いやる想像力があることなんです。ただ耳を澄まして聞くのではなく、そこには想像力があるんですね。想像力、それは表現ですよ。聞くこと自体が表現なんだと思います。

阿部: 「聞くこと自体が表現」というのは大事にしなければならぬ考え方。僕らはつい結果だけをみてしまうけれど、むしろ見せたいのは結果だけでなくそのプロセス。プロセス自体をどう見せるか？結果だけ判断してのVery Goodではないということかな。

関係性の中での「Listen」

上田: 僕は「Listen」の次の可能性は「Listening Together」といったような社会的なものにあると思っているんです。Listen というのは一人で聞くのではなく他者が聞いているのを聞き、また他者がどう聞いてくれているかを聞く。発達心理学の研究で「共同注視」というのがあり、向き合っていた母子関係から、同じものを一緒に見るという関係に変化してくるんです。このワークショップでも、絵を一人で見るのではなく、みんなで見るわけですよ。同じ絵をいろんな人が見ている。他者との多様性の中で聞くというところがおもしろいと思うんです。絵がみんなを結びつける「触媒」のような働きをしてるんですね。

阿部: 触媒には英語で「Catalyst」と「Mediator」の二つの言葉があります。僕は二番目の「Mediator」って言葉に注目しています。上田先生の言う「結びつける」「つなげる」ってことですね。今の社会はいろんな「つながり」が切れている。これをあらためてつなげるって作業を誰かがしなきゃいけないって思っているんです。つなげること、結びつけることによって新たな価値が生まれる。僕はそれを「関係価値」※と呼んでいます。現代社会の中で知らないうちに失っている価値です。昔は当たり前につながっていたものが今は切れ端も見えない。「食」なんかでもそうですね。昔はつくった人の顔が見える関係でした。あのおばちゃんがつくったコロッケは美味しい、とかね。そういう関係が遠くみえなくなってしまうことで不安になっている。今はよその誰か知らない人のつくったものを僕たちは口にしている状態です。食に限らず、こうして失ってしまったつながりを再び結び、あるいは見えるようにするのが「Mediator」だと思います。

上田: 僕らは、イヴァン・イリイチ※の言う「Convivial Environment」をつくりたくて学びの環境づくりの研究を行っているんです。同僚はこれを自立共生と訳しました。つまり一人ひとりが立ってともに生きる。自立している個人がいる中

で、共に何かをつくっていくことがすごく楽しいし、それが本当に楽しい社会をつくっていくんだ。

佐藤: このワークショップのデザインも、まさにそうになっていて、一人ひとりが1枚の絵をじっくりと見て読み込んでいるから次の議論で私の選んだ絵はこうなんですって語るができるし、それが楽しい訳です。

「Listen」＝「表現」

佐藤: 私がさきほど言ったこのワークショップでの「Listen」とは、「make meaning = 意味をつくること」だと思います。鑑賞だけど、表現であって、クリエイティブな行為だと考えます。

上田: 「Listen」しながら、僕たちはずっと meaning construction している。聞きながら意味を作り、意味づけながら聞いていて。そういうプロセスの中にいるわけですね。

田中: 僕たちのモノづくりの分野で言う「Maker」に対して「User」なんです。作る人にたいして使う人って考えるんですよ。FabLab※の場合はまず自分のほしいものを自分で作るというのが、そもそものはじまりで、つまり、「User」が「Maker」になるというわけですね。

阿部: 「User」が「Maker」という考え方は大事だと思う。イタリアのスローフードでも、消費者（Consumer）が生産者（Producer）という考え方をし

ています。消費者ではなく、共同生産者（Co-producer）。生産者と消費者を分けることによって、その間が次第に遠くなってきて無関係になっていく。つながっていないことが問題です。意識の上では、消費する側も生産する側の一部だと思えることが大切です。

田中: 絶対テクノロジーでできないものの一つがこれ、「Listen」ですよ。この部分はサポートできない。表現はサポートできると思うんです。

三宅: 私は以前「Curator」という学芸員という表現者の立場にたつことによる鑑賞支援のソフトウェアを上田先生のもとで開発しました。田中さんの言うようにテクノロジーで支援している部分は表現なんですよ。けれどもその表現を支援することで自ずと鑑賞が深まっていく。鑑賞と表現のサイクルをうまくまわしてあげるシステムはつくれるんですね。

飯塚: このワークショップを始めた時にいろんな小学校に説明に行ったのですが、最初に「あっ子どもたちは描かないんですね、見るだけなんですよ」ってちょっとがっかりされるんです。でも実際にやってみるとすごくオモシロかった！って。

今、皆さんの話を聞いていて分かったのは、子どもたちは見るだけで、実際には絵を描かないんだけど、「Listen」している。つまり、ワークショップを通して絶えず、内面では、「表現」をやっていたんだなあということに気づきました。

※イヴァン・イリイチ

イヴァン・イリイチ (Ivan Illich) (1964-2002) は、オーストリア、ウィーン生まれの哲学者、社会批評家。1970年代以降『脱学校の社会』、『脱病院化社会』、『シャドウワーク』などを含む著書を断続的に出版し、現代産業社会批判家として有名になった。近代の制度化された教育、医療制度や、エネルギー利用の非生産性は、人間の創造性と友好関係を損傷し不能化する」と批判した。イリイチの概念はフリースクール、生涯教育運動の中で、指導的な理論となった。

(小林 舞)

※ RTV

(リアルタイムドキュメンテーション)

リアルタイム・ドキュメンテーション (Real Time Documentation) は、その場での出来事をその場で編集し、全員で共有する、新しい記録システムです。自分は何をしてきたのか、他の人とどんな風に関わりを持ってきたのか、そして、全体として何が起こったのか。その時、その場で得た体験をすばやく、かつ、みんなで共有することで、全く新しい体験の記憶が生まれてきます。

(曾和 具之)

※ Fablab

「ファブラボ」とは、3次元プリンタやカッティングマシンなどの工作機械を揃えた、誰もが使える、オープンな市民工房です。既に世界16カ国以上40か所以上に設立されて、国際的なネットワークになっています。ファブラボの目的は、「大量生産・大量消費」「生産者と消費者の分断」といった20世紀型ものづくりの行き詰まり・限界を見据え、新しい「つかうひとが自らつくる社会」への脱皮と移行を促すことです。

(田中 浩也)

私にとっての意味

佐藤: 「Listen」とは何かを定義するとすれば、「私にとっての意味をつくる」としたいですね。子どもたちの表現が、聞きなれた標語のようにならないようにしたい。それは「私にとっての」でも「つくる」でもなく「一般化された」「誰かの」言葉を借りたにすぎないでしょう。このワークショップには「この絵に意味を与える」ということと、それが「自分にとって意味をなす」というふたつの「意味づけ」があるのです。

上田: MITではPersonality Meaningful Artifactということをしごく重要視しているんです。「自分にとって意味のあることをつくる」それが非常に hard fun なんです。だからこそ苦しくても楽しいわけ。

三宅: ワークショップの中でカルタの言葉を標語のようにありきたりなものにしてしまった子どもは一般化した意味を語って、「Good」をもらおうと思ったわけですね。

佐藤: だから自分の行為に意味があるということ。「Good」と言ってあげられるカルチャーにしないでほしい。あなたの表現はあなたにとって意味がある。そこに赤丸つけてもらえるカルチャーに。このプロジェクトは、そんなカルチャーをつくっていくきっかけにもなるのではないかと思います。

※関係価値

つながることによって豊かになる価値。あるいは、つながりが切れてしまっただけで気付けくことになる価値。「交換価値」や「使用価値」のように説明概念として考えてみた。物質的に豊かになり、便利な社会となってきた。しかし何か喪失感がある。その失っているものこそ、社会のさまざまな局面での関係性ではないだろうか。関係価値と名付けることで、これまで気にかけてこなかった、つながっていることの価値を再認識できたらと思う。

(阿部 健一)

国連子供環境ポスター ワークショップと展示のこれまで

1972 国連環境計画 UNEP (United Nations Environmental Programme) 設立

1991 地球環境平和財団 (FGPE) 設立
第1回 国連子供環境ポスター原画コンテスト開催
「21世紀に残そう! 美しい海・空・森」 UNEP とともに国連本部に優秀作を展示

1992 第2回 国連子供環境ポスター原画コンテスト開催
(地球環境平和財団、UNEP 主催)、コンテストは以降毎年開催

2000 原画コンテスト応募作品を国立民族学博物館へ寄贈の覚書締結

2001 ワークショップ「わたしたちの地球：世界子ども環境ポスターの語りかけるもの」
(日本生命財団研究助成) を開催。
会場：愛媛大学附属高等学校 (松山市立桑原小学校児童を対象)

2003 「第3回世界水フォーラム」ポスター原画展示
会場：国立京都国際会議場 国立民族学博物館ブース

2005 BAYER 第14回原画コンテストに参画

2006 (株) ニコン 第15回原画コンテストに参画

2008 国連子供環境ポスター原画を国立民族学博物館より、総合地球環境学研究所へ移管

「子どもたちがつくる国連環境ポスター展」
ワークショップと展示を開催。会場：立命館小学校

国連子供環境ポスター グローバル部門審査会
会場：国際文化会館、六本木

2009 「第5回世界水フォーラム」連携展示ポスター発表
会場：イスタンブール

国連子供環境ポスター グローバル部門審査会
会場：UNEP 本部 (ナイロビ)

「子どもたちがつくる国連環境ポスター展」ワークショップと展示を開催
会場：金沢大学附属小学校 (石川県)

2010 「子どもたちがつくる国連環境ポスター展」カルタワークショップを開催
会場：日進市立西小学校 (愛知県)

「子どもたちがつくる国連環境ポスター展」カルタワークショップを開催
会場：河合町立河合第三小学校 (奈良県)

「子どもたちがつくる国連環境ポスター展」カルタワークショップを開催
会場：金沢大学附属小学校 (石川県)

金沢大学附属小学校による「かしわコンサート」会場にて展覧会
会場：石川県立音楽堂コンサートホール

地球研地域連携セミナー「にほんの里から世界の里へ」会場にて展覧会
同時開催 会場：石川県立音楽堂邦楽ホール

国連子供環境ポスター グローバル部門審査会 会場：総合地球環境学研究所

地球研地域連携セミナー「多様性の伝え方」同時開催 会場：名古屋大学豊田講堂

COP10 生物多様性交流フェア会場：名古屋国際会議場エキスポゾーン

国際子ども環境会議 コンテスト表彰式 会場：名古屋市ナディアパーク

日進市立西小学校の子どもたちが、修学旅行で地球研を訪れ「MIDORI- 繋がる輪～」を合唱。
また、英語・日本語・中国語で環境への思いをスピーチ。会場：総合地球環境学研究所

2011 「子どもたちがつくる国連環境ポスター展」カルタワークショップを開催
会場：エイトリアムスクール (ボストン)

「子どもたちがつくる国連環境ポスター展」ドロップインカルタワークショップと展覧会を開催
会場：ボストンチルドレンズミュージアム (ボストン)

「子どもたちがつくる国連環境ポスター展」絵本ワークショップおよび展覧会を開催
会場：国立台東大学附属小学校 (台湾)

国連子供環境ポスター グローバル部門審査会 会場：バイエル・ポーランド

「森と草原の地球教室」(愛知県立大学主催、総合地球環境学研究所共催)にて、
「子どもたちがつくる国連環境ポスター展」カルタワークショップを開催
会場：愛知県立大学、モリコロパーク

2012 第6回世界水フォーラム
・同志社小学校にて、プレワークショップを開催 会場：同志社小学校 (京都)
・フランスと日本の子どもたちが「私の好きな一枚の絵」を音で表現するワークショップと
「Sound of water workshop」を開催 会場：Parc Chanot(マルセイユ)

国連子ども環境ポスター グローバル部門審査会 会場：株式会社ニコン本社

「子ども霞が関見学デー」にて「私の好きな一枚の絵」ワークショップを開催 会場：文部科学省

2013 国際コモンズ学会第14回世界大会
・コモンズ研究者たちが、「私の好きな一枚の絵」ワークショップに参加 会場：地場産業会館 (山梨県富士吉田市)
・山梨県立富士北稜高等学校生徒らが「私の好きな一枚の絵」ワークショップに参加 会場：地場産業会館 (富士吉田市)
・「おんしりん森づくりフェスタ」にて OSUSOWAKE ワークショップ開催 ふじさんホール・富士吉田市民会館

国連子ども環境ポスター グローバル部門審査会 会場：UNEP 本部 (ナイロビ)

「子ども霞が関見学デー」にて「子どもの絵で世界一周!」ワークショップを開催 会場：文部科学省



国連子供環境ポスター原画コンテスト作品集
『世界の子どもたちの地球想い展』

発行日： 2014年3月
発行者： 総合地球環境学研究所
編集： 阿部健一（総合地球環境学研究所）
飯塚宜子（地球たんけんたい Labo）
三宅由莉（trois maison）
デザイン： 三宅由莉（trois maison）
イラスト： 夏目奈央子
展示管理： 総合地球環境学研究所

